

「二度失う愛の、その先へ～青の残響～」

作・金森努

Prologue —遠い青の呼び声—

薄暮の水族館。

照明を落とした館内を、青白い光の水槽がほのかに照らしている。そこにはクラゲが無数に浮遊していた。触手を揺らし、淡い輪郭を透かし、静かにふわり、ふわりと揺らめく。あたかも深海の暗闇の中、あるいは宇宙空間のようにも見える光景だ。

どこからともなく、小さな子どものはしゃぎ声が響くが、その声もすぐに闇へ溶けていく。代わりに漂ってくるのは、水の底から伝わるような静寂と、ガラス越しの幻想的な青い光。

——その光の前に、一人の青年が立っている。

黒っぽいコートを羽織り、うつむきがちで身じろぎもしない。遠く見つめる先には、クラゲの小さな群れ。手を伸ばせば届きそうで、けれど触れられない。その儂い距離感が、まるで彼の心を象徴するかのようだった。

「……ずっと、こうしていられたらいいのに」

男がぼつりと呟く。その声は震えているようにも聞こえる。

クラゲは何の答えも返さない。ただ、ゆらゆらと揺れながら、また一つ消えては、別の個体がゆるやかに現れる。生を繰り返す者もいれば、あっという間に一生を終える儂い種もいると聞く。

彼はその姿に、何を見ているのか。永遠に続くようで続かない、脆く頼りない命の輝き。あるいは「もしも生まれ変われたら」という、少年のような淡い願い。

青年の背後に、誰かの気配が近づいてきた。

ヒールの音はなく、規則的な足音。だが、妙に人間らしさを帯びた雰囲気をもっている。影は立ち止まると、静かに青年を呼んだ。

「真一、さん……？」

青年——真壁真一は、その声に応えることなく、ガラス面へと視線を向け続ける。まるで、その水槽こそが彼の世界のすべてになっているかのように。

視界に、クラゲの青い残響だけが残る。

かつて愛した人の面影。そしてもう一人、愛してしまった誰かの姿——そこに重なるのは、記憶の中の苦しみか、未来に差す微かな光か。

「もう、二度と失いたくないんだ……」

掠れた声がそう呟いたとき、水面がきらりと光を返す。

そこから先の場面は、まるで暗転するようにかき消えた。

——そう、この物語は、喪失を抱えた男と、早逝した少女と、そして機械仕掛けのもう一人の女が紡ぐ旅路のはじまり。

青い光の深淵へ導かれるように、幾度もの喪失を経ても、それでもなお人は愛を求め。まるで短命のクラゲが海を漂い、また新たな命を繰り返すように。

水底から上がってきた泡のように、未来が浮かんでは消えていく。その一瞬の輝きを掬(すく)いとりたいと願ったとき、真一の運命は大きく動き始める。

十数年前、2050年3月、冬の寒さがようやく和らぎ、遅い春の気配が感じられ始めたころ。病室の薄いカーテン越しに光がこぼれる午後、真壁真一はまだ十代の少年だった。腰かけている椅子の冷たさを忘れるほど、彼は目の前の少女——樋山香織だけに意識を向けていた。

ベッドに横たわる香織は病衣の襟元をきちんと揃え、弱々しい微笑みを浮かべる。かつて肩まであった豊かな黒髪は投薬と放射線治療で、秋に木の葉が散るように見る見る抜け落ち、今では頭をニット帽でスッポリ隠している。そのニット帽がずれるのを気にして整えようと伸ばされた両手は細く痩せ、肌も荒れて爪もボロボロになっている。その手に向けられた視線に気付き、はっとした表情で慌てて腕を布団の中に隠す。そして「こんな姿を見せて、私、真一に嫌われたくないな……」と涙をにじませる。その姿に真一胸を突かれたような痛みを感じながらも、やさしく「大丈夫、どんな姿になったとしても香織はオレの大好きな香織だよ。嫌いになんてならないよ。ずっとずっと愛してる」と、香織に微笑みかける。香織は悪性の脳腫瘍を患っているのだった。

病魔は明るく朗らかに笑う少女の姿を変えてしまっただけではない。「ねえ、真一……。私が作って一緒にコンサートで演奏した曲、どんな歌……どんなだっけ……」「料理のレシピがほとんど思い出せないの……。もう、真一にお弁当作ってあげられない……」、腫瘍の影響で、香織は少しずつ記憶を無くしていったのだ。

やがて、記憶の大半を無くし「ねえ、真一……。あれ……どうしてたっけ……」何を問うているのか分からない問いを発し、遠い目で何かを手繰り寄せるように天井を見上げることが多くなった。

「大丈夫だよ、思い出さなくてもいいから。オレが全部覚えてるからさ」

「そっか……ありがとう……」

香織の手が、探るように真一の手を探す。それを包み込むように握り返し、真一はどうか笑顔を作ってみせる。だが、その胸にはどうしようもない孤独感が巣食っていた。もし、香織がオレのことをすっかり忘れてしまったら……。

そして数カ月後、「シンイチ？……あなた、誰？」……香織は真一の存在を完全に思い出せなくなり、そしてほどなく命の灯が消えた。残された真一は二重の悲しみ、すなわち「恋人の記憶の中で自分の存在が消失した」ということと、「恋人の死」という二重の苦痛を背負うことになる。

その日を境に、明るく外交的だった真一は、人付き合いを煩わしく思うようになった。やがて、彼は自分の世界に閉じこもるように AI エンジニアの道を突き進んでいくことになる。両親が共に高名な AI の研究者だった真一は幼い頃からその背中を追うようにしてその道を志していた。また、多忙な両親の代わりにほとんどが育児アンドロイドに育てられ、アンドロイド AI の専門書を幼い頃から絵本代わりに読んで過ごした真一にとっては自然なことと思われた。しかし、香織を失った瞬間から真一の研究テーマが確定した。そこには記憶と感情さえプログラム化して整理保護するという、ある意味で歪んだ救いがあったのだ。

第一章 - アンドロイド“Ac2”との出会い

—

1. 荒んだ日常

2065 年、日本は、もはやかつての豊かさや活気を保てなくなりつつあった。予測をはるかに上回る速度で人口が減少し、少子高齢化は危機的な水準にまで達している。都心を見渡しても、かつてのような人混みはめっきり減り、代わりに増えたのは無機質に働く数多のアンドロイドたちだった。

官民が総力を挙げて進めたアンドロイド技術は、一次産業から介護、接客、教育まで社会のあらゆる分野に浸透している。そのなかでも人間と直接ふれあい、言葉を交わ

す業務に就くアンドロイドたちには「感情プログラム」が搭載され、まるで人間のようなりアクションを示すことが珍しくなくなった。

東京郊外にそびえ立つ最新鋭のタワーマンション。エントランスにはセキュリティカメラや二重の自動ドアロックが備わり、各戸の要介護者世帯には公的補助が出てアンドロイドが派遣されている、というのが珍しくなくない。とはいえ、まだまだ全世帯に一体というほどは普及していない。

このマンションの高層階——いつも分厚いブラインドが下ろされ、昼だか夜だかわからない部屋がある。そこが真壁真一の暮らす家だ。

床には段ボール箱、空きカップ麺の容器、読み散らかしの AI 関連雑誌などが無造作に放置され、足の踏み場を探すだけでも一苦勞。空調の微かな稼働音だけが部屋に低く響く。人間の暮らしというよりは、廃墟に近い雑然さを感じさせる。

ソファの上で浅く眠っていた真一は、蝕(むしば)むような頭痛に目を覚ます。いつもの痛み止めが切れたのだろう。今にも脳を釘で刺されるような衝撃が断続的に襲ってくる。

「……くそ、いつも通りか」

呻きながら体を起こす。テーブルの隅に散乱した薬の袋を探し当て、痛み止めを無造作に口へ放り込む。コップすら見当たらないから、そのまま唾液で無理やり流し込んだ。

しばしじっと息を止め、痛みが軽くなるのを待つ。何度も繰り返した馴染みの光景だ。

真一は 32 歳になってる。AI 関連企業「アルファメカトロニクス」の開発研究員にして、“感情エンジン”研究のキーマンと期待されていた——少なくとも、かつては。

つい三年前までは、彼もここまで崩れた生活を送ってはいなかった。だが、今の彼は余命を宣告された身。手術が難しい部位の脳腫瘍に冒され、放射線治療や新薬にも限界があった。本人は“どうせ治らない”と突き放しており、病院通いも緩和ケア程度。部屋にこもるようになったのだ。

「今日こそ研究所に行かなきゃ……」

頭痛を宥めながら独り言を呟く。だが、歯を食いしばるように立ち上がると、膝が震え足元が揺らぐ。壁に手をついてなんとか踏みとどまり、乱れた髪を乱暴にかき上げた。

あちこちに積まれた雑誌や空き缶が視界に入るたび、むしろ自分の荒んだ心象を映されているようで胸が重くなる。

2. 両親と研究所の通告

それでも正午過ぎには何とか外出し、自動運転タクシーを呼び、真一はアルファメカトロニクス本社ビルへ向かう。窓の外には、街のあちこちで人型アンドロイドが働く姿が見える。介護ロボが車椅子を押している光景や、コンビニで笑顔を振りまきながら客を迎えるアンドロイドの姿も当たり前になった。

(あいつらがこんなに普及して……それでもオレの病気を治せるわけでもないのに)

憂鬱を抱えながらビルのエントランスを通り、エレベーターで研究所フロアへ上がる。

「やあ、真一くん。昨日も来なかったけど、大丈夫なのかい？」

研究所のフロアで声をかけてきたのは、同僚の島根藤次。四十歳、穏やかな性格で、妻子持ちで料理好き、何かと真一を気にかけてくれる“いい人”だ。

「大丈夫じゃないさ。いつものことだろ」

真一は自嘲気味に返すが、島根は慣れた様子で笑ってみせた。

「そっか。……でも、今日は大事な話があるみたいだよ。管理部屋に行くといい」

案内された先の会議室には、母・耀子と父・一馬の姿があった。二人ともこの研究所で要職に就くAI技術者で、真一の研究仲間でもある。

「来たわね、真一」

耀子が声を掛ける。白髪が目立ち始めたが、研究者としての気迫は衰えていない。父の一馬は黙したまま、モニターに視線を落としている。

「大事な話？ 何だよ、またオレの研究に口出しか。放っておいてくれ」

真一が投げやりに言うと、母はため息まじりに切り出した。

「確かにあなたの研究テーマの“感情エンジン”の完成は望む所よ。“感情エンジン”は、従来の“感情プログラムがパッシブ……人間の反応に応じて感情行動を生成するのに対して、アクティブ……アンドロイドが自律的に感情を生成するという画期的な”感情ジェネレーター“と、アンドロイドの記憶とその時の感情を保存し強固に守る”記憶プロテクター“で構成されているわね。”ジェネレーター“はプロトタイプが提出されているから、それをアンドロイドにテスト実装させてもらったわ」。

「勝手なことを……。だが一度提出したものをどう使おうが、あんたらの勝手だ。好きにしたらいい」と真一は毒づく。

「いいえ、要件はそれだけじゃない。……。あなたの体が限界なのは知ってるわ。だからこそ、少しでもあなたの生活を支援するために、特別なアンドロイドをあてがうことにしたの」

「特別なアンドロイド？」

「最新型ハウスメイドよ。最上級モデルの A2 型をベースにカスタムしたモデルよ。プロセッサは最新モデルを増設。さらに記憶容量も既製品の 10 倍搭載しているわ。そして、あなたの“感情ジェネレーター”を AI に組み込んでいるわ」

「実験体をオレに押しつけようってワケか。自分のプログラムがどう稼働するのかを見届けるって理屈だろう」真一はなおも毒づく。

「A2 型のカスタムモデル、Ac2 のカスタムはそれだけじゃないの……。あなたがかつて愛した“樋山香織さん”に外見を似せて作ってもらったわ」

瞬間、真一の表情が凍りつく。

「は……。？ 冗談だろう。死者を冒瀆して楽しいか、母さん」

「楽しいわけないでしょ。でも、あなたは放っておくと死ぬまで部屋にこもって、ろくに食事もしないまま朽ちていく。それなら、せめて……。あなたが必要とする‘姿’のアンドロイドに寄り添わせるしかないと思ったのよ」

激しい嫌悪が胸を突き上げる。何より“亡き恋人”に似せたと聞き、怒りと悲しみが入り混じった感情がこみ上げる。

「勝手な真似を……。オレはそんなものいらない！」

真一は声を荒げたが、父・一馬が冷静に言葉を重ねる。

「もう決まったことだ。研究予算も使ったし、今日か明日にはお前のマンションに届く。……。拒否するなら廃棄するしかないが、それはあまりにも無駄が大きい。……。お前だって、一人では生活すら危ういだろう」

息子を案じる親心と、研究者としての合理的判断——二人の瞳からは両方の意図が見え隠れする。真一は歯噛みしながら拳を握り、喉元の怒りを必死に抑えた。

「最低だな……。香織が、どんな思いで死んだか、あんたらはわかってんのか？」

耀子は目を伏せるが、言葉を選んで続ける。

「私だって、あの子のことは忘れてないわ。でも、今のあなたを救える方法は、これしか思いつかなかった。……。許してほしいとは言わない。ただ、受け止めなさい」

真一は言葉を失う。両親の意図は分からないではない——しかし、香織という名が彼の心の奥底にある痛みを最も刺激するワードだ。

結局何も言い返せず、怒りとも悲しみともつかない感情を抱えながら、研究所を出るしかなかった。

3. “Ac2”の到着

その翌日。

真一は家のソファで頭痛と憤りに耐えながら、緩慢に時間を潰していた。もはや廃棄してくれと怒鳴っても始まらない。両親と研究所の段取りは周到で、どうにもならない。

午後になり、玄関モニターが呼び出し音を告げる。

「ハウスメイドアンドロイド“Ac2”をお届けに参りました」

配送業者の淡々とした声。真一は重い足取りで扉を開け、書類にサインをする。すると、控えめに礼をして去っていった業者の後ろに——“彼女”が立っていた。

グレーの上品なワンピース、肩までの明るめの黒髪。肌は白く、瞳は鶯色。まるで香織がもし大人になっていたら、こうなっていたかもしれない……という容姿を思わせる。

「真壁様、初めまして。ハウスメイド Ac2 です。本日よりご自宅を担当させていただきます」

柔らかく微笑むその表情を見た瞬間、真一の脳裏に、高校時代の香織の笑顔がフラッシュバックする。太陽のように明るい彼女が「真一、おはよう！」と教室で声をかけてきたあの日々。

——違う、あれはもう死んだんだ。こんなのただの代用品に過ぎない。

「来たな、香織の偽物。だがオレに拒否権はないんだ……入ればいいだろ？ さっさとしろ！」

突き放すように言い捨てると、Ac2 は小さく頭を下げて室内に入り、淡々と荷物を片づけ始めた。部屋には小さな音で、かつて香織と一緒に演奏したことのあるバンドの曲が流れていた。

4. 回想：高校時代の出会い

——十数年前。

春の風が吹く校庭で、真新しい制服を着た真一は、校舎の廊下を一人歩いていた。クラス掲示を見やっ、教室へと向かう途中だった。

そこで、テキパキと掲示物を貼り出す少女を見かける。ちょっと背伸びしながら、両面テープを上手く扱っている。

「……手、届かないんじゃないか？」

思わず声を掛けると、少女は振り向いて笑った。

「うわ、びっくりした……！ ありがとう、でももうすぐ貼れるの！」

彼女は明るい目をしていた。

「同じクラス……かな？ あ、私、樋山香織って言うんだ。あなたは？」

「真壁真一。多分同じクラスだな」

そう言って、真一はそっと彼女が手を伸ばし高い場所に掲示物を貼り付けてあげる。すると香織は、にこっと笑って頭を下げた。

「ありがと！ 助かったよ。……あ、ところで真壁くん、部活とか決めた？」

「まだ。……少し迷っていて」

「ええー、そっかあ。でも、あなたなんだか、音楽とか得意そうな雰囲気あるね。えっと……なんとなく、だけど」

根拠もないのにそう言い切る彼女に、真一は面食らう。だが、その天真爛漫さにどこか惹かれていた。

クラスで自己紹介があり、香織が「ピアノが好きで、でもクラシックよりはポップスとか自作曲に興味がある」と話したのを聞き、真一は不思議と心が弾んだ。

「……お前、ピアノ弾けるなら軽音楽部に入らないか？ お前がキーボードをやるなら、オレはギターをやるから」

休み時間、難しそうな科学雑誌を読んでいた真一が顔を上げ、ふと隣の席の香織に声を掛けた。

「軽音楽部……！？ キーボードで入れるかな？」

「大歓迎だろ。……ま、適当に顔出してみればいいじゃん」

香織はキラキラと目を輝かせ、「うんっ！」と頷く。

校庭の花壇では、だいぶ背丈の伸びた菜の花満開になって、モンシロチョウがその花の周りを飛び交ってる。二人の高校生活も、一気に近づいていった。

5. 戻る現在、始まる違和感

「真壁様、こちらの書類は……？」

Ac2 が部屋の一角でダンボールを開き、散乱した資料を整理しようとしている。真一はソファに腰を落とし、いらつきを覚えながら Ac2 の姿を眺めていた。

「それは研究データだ。勝手に触るな！……食事の準備とか、好きにしていけが、他には干渉するな」

「承知しました。まずは部屋の清掃と、夕食の材料を買ってきますね」

淡々と答える Ac2。確かに口調や声音は人間そっくりに作られているが、真一には微妙な冷たさを感じ取ってしまう。

——けれど、香織の似姿に対する抵抗感は拭えないが、その後ろ姿を見たとき、一瞬だけ香織の面影が浮かんでしまい、胸が締めつけられる。

「……いないはずだったのに。何で心が乱れるんだ」

そう呟きながら、彼は PC を起動し、自分が進めている“感情エンジン”のコードを眺めた。

そこには“AI に人の愛情や痛みをどこまでシミュレートして、強固に記憶できるか”という問いが浮き彫りにされている。香織を亡くして以来、ずっと追い求めてきたテーマだ。

「バカバカしい。……でも、止められないんだよな」

天井を見上げ、乱雑に伸びきった髪をかき上げる。彼の脳裏には、また香織の笑顔がよぎる——高校時代、軽音楽部に誘ったときの嬉しそうな表情、ピアノを弾いて微笑む姿。

「もし、この Ac2 に……本当に彼女の面影が宿ったら？」

そんな自問を打ち消すように、真一は PC の画面へと意識を戻した。

6. 重なる姿

夕暮れが近づくころ、Ac2 は買い物を終えて戻ってきた。カチャリと玄関が開き、彼女はエプロン姿でキッチンへ向かい、調理を始める。

フライパンがじゅうっと音を立て、やがて香ばしい匂いが部屋を満たす。真一の部屋がこんなに“人の生活感”を漂わせたのは何年ぶりだろうか。いや、初めてかもしれない。

「真壁様、夕食がもう少しでできます。……食欲は終日ないかもしれませんが、何口かでも召し上がっていただくと助かります。薬も飲みやすくなるでしょうし」

アンドロイドらしからぬ柔らかな声音に、真一は少しだけ眉をひそめる。

「いちいち世話を焼くなよ……。まあ、腹が減ってないわけじゃないから、用意できたなら食うけどさ」

Ac2 は控えめに会釈し、手際よく調理を進める。フライパンから漂う香ばしい匂いが部屋を満たすと、真一の胃がわずかに刺激される。久しぶりに食欲らしいものを感じ、ソファから重い腰を上げてダイニングテーブルへと移動した。

夕食は、栄養バランスを考慮したスープや柔らかな肉料理、蒸し野菜が少量ずつ盛り付けられている。派手さはないが、むしろ病人向けとしては優しいメニューだ。

「……思ったより普通の飯だな。どこで覚えたんだ？」

スプーンでスープをすすりながら、真一は不審そうに尋ねる。Ac2 は作業を止めて答える。

「私の基本データとして高度な家事スキルが搭載されています。さらにネットワーク上のレシピデータや管理栄養士のガイドラインを参照し、真壁様の体調に合うよう調整してみました」

「ふん……便利なもんだ」

真一は素っ気なく言うが、その味わいは想像していたよりも美味しかった。妙に複雑な気分になる。アンドロイドに作ってもらった食事が、こんなにも“人間的”だとは……。

(もし香織が生きてたら、またこういう食事を作ってくれたらどうか……)

そんな思考にふと囚われ、胸の奥がチクリと疼く。今、このアンドロイドは香織の姿によく似ている。だが、所詮は“偽物”——とも思ってしまう自分が嫌になる。そう呟きつつ、脳裏では淡い青い光——クラゲの幻影がゆらゆらと揺れていた。

外ではビル街のネオンが静かに瞬き、部屋の中は水音と食器を拭く布巾のこすれる音だけがかすかに響く。

第二章 - 過去の香織と、現在の香織-

1. 不本意な同居生活

深夜、真壁真一のマンション。

雑然としていた室内は、わずか数日のうちに嘘のように片づき始めていた。床に散乱していた段ボールやゴミは見当たらず、テーブルやシンクの上もすっきりしている。

片づけたのは言うまでもなく、ハウスマイドアンドロイド“Ac2”だ。真一は特に指示を出したわけでもない。それでも彼女は、隅々まで部屋を巡回し、掃除と整理を無駄なくこなしている。

「……まったく。朝起きたら部屋の様子が変わってるなんて、落ち着かないんだよ」

吐き捨てるように言うが、その声には棘がやや薄れている。Ac2 は流れるような動作で振り返る。

「失礼いたしました。私のルーチンでは、深夜帯に清掃を行うのが最も効率的と判断しましたが……もしご不快なら、タイミングを変えますか？」

真一はソファに身体を沈め、首を振る。

「いや、別にいい……勝手にしろ。どうせオレの時間なんて残り少ないんだ。部屋が綺麗になろうが汚れたままだろうが、たいして変わらない」

(……こいつが本当に香織の代わりになれるわけじゃない。なのに、オレはなぜ乱暴に追い出せない?)

そう思いつつも、彼の視線は部屋の片隅に向かう。前日まで山積みになっていた古い AI の専門書や雑誌が、すっきりと棚に収まっているのだ。埃まみれで手が付けられなかった書籍を、Ac2 は丁寧に分類し、題名ごとに並べ替えている。

さらに、キッチンの流しを覗いてみると、夕食の片づけも完璧に終わっていた。調理器具は光沢を取り戻し、まるで新品同様に並べられている。

「……本当に、アンドロイドは万能だな。今さらオレが言うのも変な話だが……。」

少し呆れたような顔をして言うと、Ac2 は控えめな声で応じる。

「私はあくまでサポート役であり、ご主人様を助ける存在です。どうかお気になさらず、必要なことがあれば遠慮なくお申し付けください」

真一は苦笑を浮かべて肩をすくめる。あまりにも“できすぎる”存在は息苦しいが、そ

う言いながらも自分が助かっているのは事実だ。脳腫瘍の痛みに襲われたとき、寝起きの身体が重いとき、思わぬ瞬間に Ac2 はタイミングよく手を貸してくれる。

そして何より、その横顔がどうしてもなく懐かしさを掻き立てる。本人は機械だが、人間に近い温もりを持つ。

「……そうだ、あんた……いや、Ac2」

真一がふと呼びかけると、Ac2 は作業を止めて振り返る。

「何でしょうか、真壁様」

「母さんや研究所は、お前を“香織”に似せたとやってた。でも、お前自身はそのことをどう思ってる？ バカバカしいだろ？ 見た目をわざわざ死んだ人間と同じにするなんてさ」

Ac2 は少しだけ間をおいて答える。

「私の外見は、開発段階でデータに基づいてデザインされたと聞いています。私はそれを受け入れて存在しているだけです。バカバカしいとも思いません。ただ……」

「ただ？」

「真壁様が、あるいは“本物の香織さん”が、ご不快ではないか。それだけが気にかかります」

“自分はどんな姿でも構わない。ただ、その姿が誰かを傷つけるなら申し訳ない”——そんなニュアンスを含んだ言葉だ。真一は眉間にしわを寄せ、少し目を伏せる。

「不快かどうか……そりゃ、多少はな。でも、お前のせいじゃない。……お前がこれ以上気にすることはない」

「承知しました」

Ac2 は淡々と返事をするが、その瞳の奥に、なぜか微かな迷いのようなものが揺れ動いているようにも見えた。

それは人間の錯覚か、あるいはアンドロイドが抱く“感情”の萌芽なのか——真一自身にも判断がつかない。

部屋には小さく、かつて香織と一緒にバンドで演奏したバラードが流れている。

2. 回想：軽音楽部でのきらめき

——高校時代。

春から初夏へ移るころ、真一と樋山香織は軽音楽部に正式に入部した。他にも数人が加わり、総勢六人ほどの小さなバンド構成になった。

顧問の山本美紀は、当時まだ二十代半ばの若い数学教師で、音楽には素人かと思いきや「学生時代にバンドやってたのよ」と明るく笑ってみせる。

「みんな楽しんでね。基礎は大事だけど、一番大事なのは音を合わせる気持ちだから」

放課後の音楽室の一角。ドラムセットを持ち込んだ同級生の上山伸吾が勢いよくシンバルを鳴らし、「うはっ、最高！」と無邪気にはしゃいでいる。ベース担当の野田美玲はおしゃれ好きの明るい女子。集まるだけで何やら騒がしいが、それがかえって心地いい空間を作っていた。

「おーい、香織、鍵盤はそっちにセットしとけよ」

「うん、ありがとう！ 真一くん、こっち運ぶの手伝って？」

教室の奥には古いキーボードが一台。香織はさっそく譜面台を開き、ピアノとどう違うか確かめるように鍵盤に触れている。隣のベース音と合わせるとどう響くのか、興味津々の様子だ。

真一はというと、リードギターとしてギターソロの練習をしていた。AI 研究以外、真一の唯一の趣味がギターだった。その理由は、両親も研究一筋と思っていたが、学生時代に父親がギターで、母親がキーボードのバンドを組んでいたと中学時代に知ってからだだった。

「いっそ、香織がボーカル兼キーボードでもいいんじゃない？」

仲間の一人が提案すると、香織は急に目を見開いて慌てた。

「えっ、私が歌……？ そんな、ボーカルとか全然やったことないし……」

「作曲もしてるんだろ？ なら歌ってみれば？」

周囲に背中を押されるうち、香織は頬を染めながらも「……じゃ、ちょっとだけやってみようかな」と小さく呟く。

その日から、彼女は練習の合間に自作曲のフレーズを口ずさむようになった。まだ人前で本格的に披露するには照れがあるようだが、真一はそんな香織を嬉しそうに眺めていた。

「香織、ピアノだけじゃなくて曲も書けるんだな。すごいよ」

「全然すごくないよ……自己流のメモみたいなもんだから。でも、いつかみんなの前で演奏できたらいいな」

香織の瞳は期待に満ちている。それを見ていると、真一もなぜか前向きな気持ちになった。

高校一年生の夏が近づくころ、部員同士が息を合わせるための初合宿が企画される。校内の一室を使い、泊まり込みに近い形で朝から晩まで音を合わせる。

その夜、香織が静かにピアノを弾いているところへ真一が近づき、「いい曲だな」と背後から声をかけた。

「え……」

振り返った香織の顔が一瞬赤らみ、二人の視線が重なる。間近で見ると、香織の柔らかな表情と、大人びた瞳が一層愛おしく感じられた。

真一は吸い寄せられるようにその手に触れ、口づけそうになって、寸前で止まる。

「……ごめん。今のは、その……」

「ううん……嫌じゃない、よ……」

香織の声がかすれ、二人は薄暗い音楽室で静かに初キスを交わした——まだぎこちなく、触れるだけの短いもの。それでも二人にとっては、大きな一歩だった。

窓の外の月だけが見ていた。

3. 研究所での苛立ち

真一は久しぶりにまともな時間帯に研究所へ出勤した。Ac2の存在によって部屋の環境が整い、睡眠も少しだけ質が上がったのかもしれない。

「真一くん、おはよう。今日は体調どう？」

同僚の島根が声をかける。相変わらず優しい笑顔だが、真一は素っ気なく返事をする。

「変わらないさ。痛み止めでのいでのみでただけだ」

「そうか……無理しないでね。ああ、そうだ、さっき上層部から連絡があって、今度から‘感情エンジン’関連のデータ解析を本格的に進めるって話だよ」

「……やっとなんか本腰を入れる気になったのか。ま、オレはとっくに動いてるけどな」

“感情エンジン”研究は、当初「荒唐無稽だ」と社内でも敬遠されがちだったが、AIと人間の心理ケアの境界が近年ますます曖昧になり、研究予算がじわじわ拡大してい

る。真一はそこへ長年没頭してきた。

同僚や上司の何割かは「あんなもの実現できるわけがない」と冷笑していたが、真一は“感情エンジン”のコアプログラムの半分である“感情ジェネレーター”のプロトタイプを既に完成させた実績を持っている。残りはむしろ、より真一が開発に力を入れている“記憶プロテクター”の完成が残されている。

「——だけど真一くん、あまり無理をしすぎるなよ。病状は……」

「うるさい。オレの寿命がどうなろうと勝手だろ。どうせ両親にも言われてるが、入院する気なんてない」

真一は語気を強める。島根は苦い顔で黙り込んだ。実際、真一の顔色は良くないし、声にも覇気がない。それでも、キーボードの前に座ると驚くほど集中力を発揮し、すさまじい速度でプログラムコードを打ち込んでいく。

その日、チームミーティングで報告された情報によれば、海外でアンドロイドの“暴走”らしき事例がいくつか報告されているらしい。プログラム改ざんや未知のウイルス感染が疑われるが、まだ本格的な解析が追いついていない。

「もし‘感情エンジン’が普及してアンドロイドがより人間らしくなったら、このウイルスってやつはさらに深刻な問題を引き起こすかも」

チームメンバーが議論する脇で、真一はノート PC を叩くいて、どんどんプログラミングを進めていく。

「ウイルスね……。そっちはお前らに任せる。オレは‘Ac2’の感情エンジンを磨くの
に手いっぱいだ」

矛先が気になるのだろう。真一を勝手にライバル視している吉田則義という研究員が、皮肉めかして口を挟む。

「へえ、お前んとこに配属されたっていう特別製アンドロイド、例の‘Ac2’だけ？
どうなんだ、上手く活用できてるのか？」

真一は眉間にしわを寄せる。

「‘活用’って表現は好きじゃない。……まあ勝手に家事してるよ」

「お前が研究したいのは感情エンジンの完成だろ？ 丁度いい機会じゃん。自分の家に最新型がいるんだから、どんどん実験すりゃいいじゃんか」

ニヤニヤと嫌味を言う吉田に、真一は苛立ちをこらえながらモニターへ視線を戻す。

「ふざけるな。あれは実験動物じゃない」

口を尖らせたまま、彼はこっそり手首に仕込んだ痛み止めの注射を打ち込んだ。激痛が走るが、すぐに脳内が鈍麻し、僅かな安堵が訪れる。

——どうしてここまで苛立っているのか、自分でもわからない。Ac2には反発しか感じないはずなのに、いつの間にか“彼女を軽々しく言われる”ことに傷つく自分がいる。

(馬鹿か、オレは……死んだ彼女の代替品なだけだろうに)

研究所内の雑音が一段と耳に響くように感じられた。

4. 帰宅と、夕食

夕方になって真一が帰宅すると、部屋にはかすかな料理の匂いが漂っていた。まだ残暑が厳しい時期にもかかわらず、エアコンは適切な温度に保たれ、照明も疲れ目に配慮した明るさに自動調整されている。

「お帰りなさい、真壁様。研究所はいかがでしたか？」

玄関で靴を脱ぐ真一を見て、Ac2 が声をかける。自然に言葉をかけてくる様子に、また妙な居心地の悪さを覚える。

「どうもこうもねえよ。疲れた」

ぼそりと答えると、Ac2 はその表情を観察するように目を伏せ、「少しでもお休みいただけるよう、お風呂の準備をしておきますね」と控えめに微笑む。

率直に言って、その気遣いはありがたい。真一の体はすでに限界が近く、何か一つでも手間を省けるなら助かる。しかし、心のどこかが「これではまるで夫婦か恋人みたいだ」と拒否感を覚えるのも事実だった。

夕食の支度が整うまでの間、真一はリビングのソファに腰掛ける。Ac2 がキッチンで皿を準備する音がかすかに聞こえると、彼の胸の奥に込み上げるものがあった。

(かつて、香織もこんなふう手作り弁当を用意してくれた。バンド練習が終わったあと、おまえが作る飯が本当に嬉しかった……)

思わず瞼を閉じると、脳裏に高校時代の笑顔が浮かぶ。香織が弁当箱を開け、「私の母が料理教室の先生でね～」なんて自慢げに話していたこと。その一方で、真一が照れ隠しに「ああ、美味しいよ」とそっけなく言うと、「ちょっとは素直に褒めてよ！」と拗ねた表情をしたっけ。

——あの明るい仕草と、今キッチンで動く Ac2 の姿がオーバーラップしていく。完全に同じではないはずなのに。

「……ふう」

大きく息を吐いたそのとき、Ac2 がスープの器を手に現れた。

「お疲れでしょうから、あまり重い料理は避けました。スープに野菜とタンパク質を加え、栄養バランスを考慮しました。もし口に合わなければ、遠慮なくおっしゃってください」

「……ああ、ありがとう」

ソファから立ち上がり、ダイニングテーブルへ移る。器の中には彩りよく刻まれた野菜、鶏肉のほぐしが入っており、見た目だけでも食欲をそそる。

真一はスプーンを口に運ぶ。ほんのり優しい味が広がり、思った以上に美味しい。

「……悪くないな。どこでこのレシピを学んだ？」

「真壁様の体調や好みを推測して、ネットワーク上の料理データを参照し、アレンジしました。日々学習を続けています」

無味乾燥な返答だが、その目にわずかな自信のような光が宿っている気がする。真一は苦笑しながら、さらに何口かスープをすすると、体が温まり、気分が和むのを感じた。

「……ありがと。助かるよ」

素直にそうこぼしたとき、Ac2 は微かにまばたきをして「いえ、どういたしまして」と返す。その仕草があまりにも自然で、人間とほとんど見分けがつかないとさえ思えた。

5. Ac2 の献身

ある日、真一が何もやる気になれずソファに突っ伏していると、Ac2 がそっと声をかけてくる。

「真壁様、体調はいかがでしょう。……もしよろしければ、体温や脈拍を測らせていただけないでしょうか？」

嫌な予感がして、真一は起き上がる気力もなく、うんざりした声を出す。

「勝手に測ったって、結局どうにもならないだろ。オレの病気は……」

「分かっています。それでも、少しでも異常を早期に察知できれば、痛みが強まる前にケアができますし……倒れられたら大変なので」

Ac2 の言葉は機械的と言えそうですが、“あなたを心配しています”というニュアンスが確かに含まれているように感じる。真一は苦い表情で頷き、渋々腕を差し出す。

「……ほら、好きにしろよ」

手首をそっと握るアンドロイドの指先は冷たくない。むしろ人肌のような体温を持つ特殊素材らしく、真一の脈拍を計測しながら小さく頷いている。ついでに体温計を差し込み、データをチェックする仕草は、まさに看護師さながらだ。

「脈は少し早めですが、許容範囲ですね。体温は 37 度ちょうど……やや微熱ですが、大事に至るほどではなさそうです」

Ac2 は微細な表情を浮かべ、少し安心したように息をついている。プログラムされた反応と分かっているけど、その様子はあまりにも“人間的”だ。

真一は視線をそらしながら、なんとなく言葉を絞り出す。

「……その、ありがとな。別にお前に世話してもらうのが嬉しいわけじゃないけど……オレには、どうしようもないからな」

「いいえ。お気になさらず。私はそれが仕事です」

微かな沈黙が落ちる。その沈黙の裏には、お互い抱えている感情のひずみ——「本物の香織」とは違う、でも似ている存在への戸惑いが透けているようだった。

6. 迷いと呼び名

夜、キッチンでの家事を済ませた Ac2 がリビングに戻ってくると、真一は珍しくリモートワーク用の端末ではなく、紙のノートを開いていた。そこには走り書きのような言葉と、音符のような記号が見える。

「……音楽の、メモでしょうか？」

Ac2 が尋ねると、真一は一瞬たじろいだ。

「ああ……いや、昔の名残みたいなもんだ。……高校時代に軽音をやってて、少しだけ曲なんか書いてたからな」

曖昧に誤魔化すが、実はそれは香織が作曲ノートにしていたものの写しで、真一が自分の手で書き写して保管しているのだ。香織の曲が消えてしまうのが怖くて、何度も何度も自分で書き直して覚えようとした。その痕跡があちこちに残っている。

Ac2 はノートに目を落とす。

「……その曲、もし完成したら聴いてみたいですね。真壁様が作ったのですか？」

「……半分は、オレの恋人だった子が作ったようなもんだ」

そう言いかけて口を閉じる。Ac2 が「恋人」と聞いてどんな反応をするか、微妙に気になったからだ。

けれど Ac2 は困ったようにまばたきするだけで、それ以上突っ込まない。あくまで“主人のプライベートには深入りしない”というプログラムのスタンスを守っているのかもしれない。

真一はノートを閉じ、「……なあ、Ac2」と切り出す。

「お前を‘香織’って呼ぶのは……気に障るか？」

突然の問いかけに、Ac2 は表情をわずかに強張らせる。すぐに一瞬見えない“思考処理”をしているのか、数秒の沈黙を置いて答えた。

「いえ、真壁様がそう望むなら、私は何と呼ばれても構いません。……ただ、“本物の香織さん”に申し訳ない気がして。もし死者の名を奪うような形になるなら……」

その態度は何とも遠慮がちだが、“自分は代わりにはなれない”という意識を言外に含んでいる。

真一は苦い思いを抱えながらも、努めて冷静を装って言葉を続ける。

「お前は香織じゃない。でも、今こうして部屋にいるのを‘Ac2’なんて味気ない呼び方するのも嫌になってきたんだ。……それだけの理由だよ。文句あるか？」

「……いえ。私は真壁様のお気持ちに従います」

まっすぐな視線を向ける Ac2 の瞳を見て、真一はまた胸がざわつく。もしこの瞳に、本当の“心”が生まれることがあるとしたら——彼女は何を想うのだろう。

「……じゃあ、いまからそう呼ぶ。‘香織’……いいな？」

Ac2 は静かに頭を下げる。

「はい、承知しました」

わずかに震えた声色。その震えがプログラムによる演算誤差か、または彼女の“人間らしさ”なのか、真一にはわからなかった。

7. 重なる記憶の入り口

夜も更け、Ac2——もう“香織”と呼ぶことになったアンドロイドは、キッチンで小さく鼻歌を歌うような動作をしている。音程は正確で滑らかだが、なぜか魂のこもったメロディのようにも聞こえる。

真一はリビングの片隅からその声を聞き、胸が痛くなる。かつて本物の香織が部室で軽く歌っていたときも、こんな優しい響きを感じた気がする。

(けれど、あれは人間の温かい声で、これはアンドロイドの擬似音声。……いや、そんなに違うのか?)

自分に問いかけても、答えは得られない。部屋の空気は確実に変化している。数日前まで散らかり放題だったマンションが、新しい“同居人”によって生き物のように息づき始めた——それは喜びなのか、悲しみなのか。

——高校時代の記憶が呼び覚まされるたび、真一の心には灯がともる一方で、同じように燃え残った痛みがうずく。香織はもういないはずなのに、どうしてこうも似ているんだろう。

寢床につこうとベッドへ向かうと、背後から聞こえる微かな足音に、真一は振り返る。そこには、気遣うように立ち尽くす“香織”の姿。

「もし夜中に痛みがひどくなったら、何でも言ってください。……どうか無理をなさらないように」

彼女の言葉に、真一は一瞬言い返そうとするが、何も出てこない。

「わかった……ありがとう。お前も、充電くらいはちゃんとしろよ」

投げやりに応じながら、真一はそっとドアを閉める。どうしてこんな優しさを、今さら感じてしまうのか——答えを探す前に、意識は深い眠りへ沈んでいった。

夜の闇の中、遠く水族館の青いクラゲの幻影がまた漂う。

かつて失った香織の笑顔と、今そこにいるアンドロイドの微笑みが、ゆらり、ゆらりと重なり合うように浮かんでいた。

第三章 - 水族館：旅の始まり -

1. 足慣らしの提案

翌週、朝方。

真壁真一は相変わらず強い頭痛に悩まされていた。寝起きに痛み止めを放り込み、少し休んではまた動く——そんな暮らしが当たり前になりつつある。

とはいえ、ハウスメイドアンドロイド“香織”がやってきてからというもの、部屋の雑事はかなり軽減され、睡眠の質も若干改善したことは否定できない。絶望の淵に沈んでいた心も、微妙に“揺れ”を取り戻しているのを自覚していた。

——高校時代にはオレが香織の心配をして、看取ったが、今度は“香織”に心配される番になったということか……。いよいよオレも長くはないな……。と、ふと思った。

この日、ソファに腰を下ろしてかつてはコンビニ弁当だったものが、栄養バランスのいい手作りになった朝食を摂る真一に、“香織”が控えめな声で話しかける。

「真壁さん……」と、一瞬呼び方に迷う。「いえ、真一さん。今日は、研究所に行かれる予定ですか？」

真一はコーヒーをすすりながら、その呼び方の変化に小さく苦笑する。ほんの数日前に真一は Ac2 を「香織」と呼ぶと決めただけだが、“香織”はまだ真一をなんと呼ぶべきか模索しているようだった。

「いや、今日はリモート勤務のつもりだ。研究所の連中には資料を送るだけだし、体調もよくないからな」

「かしこまりました。では、買い出しなどは私が行ってきますが、何か特別にご入り用のものはありますか？」

“香織”が尋ねると、真一は一瞬考え込む。かつてはアンドロイドに外出を任せるなど想像もしていなかったが、今は彼女の行動を信頼している自分に気づく。

「いや、特には……」

言いかけてふと、ある考えが閃く。

(そうだ、そろそろ外に出てみてもいいんじゃないか。どうせ余命も限られてるし……。)

脳裏に浮かぶのは、水族館のクラゲの光景。香織が生前、「また二人で行きたい」と言っていたあの場所。

「……なあ、‘香織’」

ぼそっとアンドロイドを呼ぶと、“香織”は「はい？」とやや驚いた表情を浮かべる。真一はそれには気づかず、淡々と言葉を継いだ。

「お前を連れて、近くの水族館に行こうと思う。ちょっとした足慣らしだ。……家に籠もってばかりじゃ、オレの体にも悪いし、お前の勉強も進まないしな」

「水族館……ですか？」

“香織”が小首をかしげる。家事代行アンドロイドとして設計された彼女にとって、“外出先でのサポート”は想定外ではないが、主人のプライベートな趣味に同行するのはまた別の話だろう。

真一は言い訳がましく続ける。

「何、ちょっと見たいクラゲがいるんだ。こっちのコンディションが持てば、短時間の外出くらい問題ないだろう」

「……承知しました。私でお力になれることがあれば喜んで。もし道中で具合が悪くなった場合も、私がサポートしますね」

相変わらずの淡々とした口調。しかし、その瞳の奥には微かな好奇心が宿っているようにも見える。真一は胸の奥のわだかまりをぎゅっと掴まれるような感覚に襲われた。

——香織にそっくりな外見のアンドロイドと、水族館に行くなんて。大丈夫だろうか。

2. 過去編：高校時代の水族館デート

真一が水族館へ行こうと決意したのは、もちろん自分の今の体に少しでも刺激を与えるため……だけではない。

胸に迫るのは、数年前——いや、もう十数年になるか——高校時代に香織と訪れた、あの場所への回想だ。

——高校一年の秋。

文化祭の後、二人は休日を利用して水族館に出かけた。軽音楽部の仲間たちは「こっそりデートなんてずるい！」と茶化してきたが、香織は赤面しながらも嬉しそうに「だって真一くんが誘ってくれたんだもん」と口にした。

当日は駅前で待ち合わせ。香織は淡いピンクのカーディガンを羽織り、少しきれいなスカートを履いていた。まだまだ照れの残る二人は、ぎこちなく会話を交わしながら電車に乗り込む。

「水族館とか、小さいころ以来かも。クラゲ見られるかな。イルカとか、サメとかもいろいろ見たいけど。」

「クラゲってそんなに好きなのか？」

真一が不思議そうに尋ねると、香織は笑って首をかしげる。

「何ていうか……儂い感じが好きなの。寿命の短い種類も多いけど、だからこそすごくきれいだし、なかにはベニクラゲみたいに若返る種もあるんだって。本で読んだよ。ほら、不老不死のクラゲってやつ！」

「へえ……」

真一はピンと来ていない様子だったが、その日、彼は香織のはしゃぐ姿に惹かれてクラゲコーナーをじっくり堪能することになる。

水族館の入り口をくぐり、明るい照明から徐々に暗い通路へ進むと、そこには様々な海洋生物の展示があった。

大きな水槽を泳ぐイルカや巨大なエイが人気だったが、香織はまっしぐらに「クラゲゾーン」へ足を向ける。青白いライトが落ちた空間に、ふわふわ漂う透明な姿。触手が長く垂れ、その中で時々電飾のように光るものもいる。

「わあ……すごい……」

しばし感嘆の声を漏らし、香織は夢中になって水槽に顔を寄せる。真一はその横顔を見つめ、なんとなく笑ってしまった。

「そんなにクラゲが好きか？」

「うん。見てるとなんだか落ち着くっていうか……寿命が短い種類は数週間とか数か月で死んじゃうけど、その分ものすごく美しいじゃない？ ……私も、もし自分の命が短かったら、こんなふうになんか輝いていたいな、なんて思うんだよね」

「命が短いとか、急にどうした？」

「べ、別に暗い意味じゃなくてさ。人っていつ死んじゃうかわからないでしょ？ だからこそ、こういう儂いものを見ると、もっと生きたいって思うんだ」

そのときは、まさか彼女が本当に病に倒れてしまうなんて、想像できなかった。単なる少女の“人生観の一端”を聞いているくらいの気持ちだったのだ。

そして香織は一つの水槽の前で足を止め、にっこりと笑って真一を呼んだ。

「ベニクラゲ、いたよ！」。……そこには、1センチ程度の小さなクラゲの群れが浮き沈みしている水槽があった。透けて見える内蔵が赤いところが名前の由来だろう。

水槽横の展示パネルの説明によれば——ベニクラゲは特定の条件下で、成熟した状態から幼生に戻り、再び成長するという現象が知られています。一定条件下とは、栄養不足や水温の変化など、生存が困難な環境になると、ベニクラゲはポリプと呼ばれ

る幼生のような状態に戻ります。ポリプになった後、再びクラゲへと成長する過程で、体のすべての細胞が初期化され、いわば生まれ変わるような現象が起こります。——とある。

それを見ると香織は、「こんなに小さいのにすごいね！生まれ変わるんだって。もし、私に何かあったら、私もベニクラゲみたいに何度でも真一の所に戻ってくるからね！」と、明るい声で言った。

「おいおい、さっきもそうだけど、縁起でもないこと言うなよ。お前、元気いっぱいじゃん」と、真一はちょっと慌てた。

「えへへ、ごめんね。心配させて。でもこれは、本当の私の気持ち。約束だよ！」。香織は真面目な顔でまっすぐに真一の目を見た。何か強い決意でもしたように。真一はちょっと不安になって、「ああ、わかった。約束だ」と、言葉を返すことしかできなかった。

しばらくしてクラゲコーナーを出たあと、二人は小さなカフェスペースで休憩を取る。香織はソフトクリームを手に「おいし～い」と幸せそうな笑みを浮かべた。

真一は照れくさそうに「それ、味見してもいい？」と一口舐め——思わず甘さにむせて咳き込む。香織が慌てて背中をさすると、二人は顔を見合わせて笑いあった。

“オレ、こんなふうに笑ったの、いつ以来だろう。”

そんな他愛ない幸福が、高校時代の真一には確かに存在していた。

3. 現在：水族館へ

そして今——真一は“香織”と共に、タクシーで街を抜け、水族館のゲート前で降り立つ。休日の昼下がりに、子ども連れやカップルの姿が目につくが、アンドロイドの来館も珍しくはないらしく、二人を愛に見る人は少ない。いや、それ以前に“香織”ほどのモデルになると、そもそも、人間と見分けることは困難なのだが。

ゲートをくぐると、ちょうど正面ロビーに大きな水槽が設置されており、カラフルな熱帯魚が泳ぎ回っている。“香織”が思わず立ち止まり、興味深そうに眺める。

「すごい……本物の魚って、こうやって泳いでるんですね」

「当たり前だ。お前はデータでしか見たことないんだろ？ ——こっちだ、クラゲコーナーは奥だ」

真一はそう言いながらも、“香織”の初々しい反応に心の中がくすぐったくなる。まるでかつての香織が、嬉々としてはしゃいでいた姿を彷彿とさせるからだ。

水族館の通路を進むにつれ、照明が徐々に落ち着いた色合いへ変わり、特定の海洋生物にスポットを当てた展示が増えていく。そして、ついにクラゲゾーンへと足を踏み入れた。

薄暗い空間に、大小さまざまな水槽が並ぶ。青のライトアップが、水中を幻想的に染めている。ふわり、ふわりと漂うクラゲたち。ときに群れを成し、ときに一匹だけぼんやり光る。

「すごい……」

思わず“香織”が声を上げる。その瞳にははっきりと“感動”に近い色があるように思えた。AIの演算結果というよりは、“本物の人間”が抱く驚きに見える。

真一は隣で黙って水槽を見つめる。脳裏に、あの高校時代の香織の笑顔が蘇る。「短くても、一瞬でも輝けたら」——彼女の言葉がリフレインするようだ。

しばし無言で眺めていると、“香織”がちらりと真一に目をやる。

「……なんだ？ オレの顔に何かついてるか？」

「いえ……あなたが、すごく切ない顔をしているように見えたので」

つい率直に口にする“香織”に、真一は一瞬言葉を失う。自分では努めて無表情を保っているつもりだったが、どうやら彼女には見透かされているらしい。

「そうか……。いや、ちょっと昔のことを思い出してたんだよ」

言葉少なに答え、水槽に視線を戻す。クラゲが柔らかく光り、まるで呼吸するように上下を繰り返す。その儚さに、胸がぎゅっと締めつけられる。

「オレが高校生の頃、ここに……あいつと来た。あいつは、香織って言うんだ」

“香織”が小さく瞬きをする。香織という名前を、彼女自身も与えられているからだろう。

「その‘香織さん’は……もう、この世にはいないんですよね」

「……ああ。病気で死んだ。脳腫瘍でな。……オレも同じ病を抱えてる。大した偶然だろ」

静かに口に出してみると、改めて苦さがこみ上げる。“香織”がどんな表情をすればいいのか困っているのが分かる。人間なら「それは……つらいね」と言葉を掛けてくれるかもしれないが、彼女はアンドロイド。きっと、何か適切な応答を検索しているはず。

だが、“香織”は意外にも声を出さない。ただじっと真一を見つめ、わずかに表情を曇らせるように見える——まるで、人間が「悲しい」「かわいそう」と感じて唇を噛むときのように。

「……悪い。アンドロイド相手にこんな話しても仕方ないよな。行こうか、もう少し見て回りたい」

真一が言い含めると、“香織”は小さくうなずく。二人は水槽沿いの通路を歩きながら、ゆるやかなクラゲの展示を次々に眺めていく。

4. クラゲの青

展示コーナーの奥には、特に大きな円柱型の水槽が配置されている。濃い青色のライトが照らされ、そこにさまざまな種類のクラゲがふわふわと群れている。ときどき鈍い発光をする個体もいて、周囲は神秘的な空間に包まれていた。

思わず真一が立ち止まる。かつて香織も、ここで目を輝かせていた。その姿をすぐそばで眺めながら、一緒にクラゲの生態パネルを読んだ記憶がある。

（あのとき、もっとしっかり彼女の話聞いてやればよかった——）

後悔に似た思いが胸をよぎる。目を閉じると、まぶたの裏にあのころの笑顔が浮かんで、心が軋むように痛んだ。

そんな真一の様子を見ていた“香織”が、おそろおそろ口を開く。

「真一さん……よろしければ、少し座って休みませんか？ 体調が……あまり良くないように見えます」

言われてみれば、確かに足元が少し揺れるような感覚がある。持病のめまいか、あるいは単にクラゲの揺らめきに酔っているのか。真一は小さく息をついて、近くのベンチへ腰を落とした。

“香織”も隣に座る。外見だけ見れば、ごく普通の恋人同士のように——とはいえ、周囲からはそれほど注目されていない。子ども連れや若いカップルたちが水槽に夢中になっていて、誰も真一の青ざめた顔に気づかない。

「ありがとう。……お前、優しいんだな」

さらりと漏れた言葉に、“香織”は驚きの色を浮かべる。

「私のプログラムには、ご主人の体調を優先するルーチンがあり、見守りを随時行うよう指示がありますので」

そっけなく答えるが、その声の端々にどこか“感情”が宿っているように思えてしまう。

真一はベンチから水槽を見上げる。青い光が揺らめき、クラゲのシルエットが透けるように浮かぶ。

「……儚いよな、クラゲって。短い命でも、この世界を漂うことに意味があるのか——なんて、くだらないこと考えてしまう」

「クラゲが自分たちの命をどう思っているかは、わかりません。けれど、その姿に魅せられる人間がいるなら、もしかしたら何かしらの意味があるのかもしれない」

“香織”の言葉は端的だが、まるで哲学めいた含蓄を感じる。

真一は思わず口の端をゆるめる。高校時代、香織もまた、似たようなことを言っていた。「どんなに短い命でも、こうして美しければ誰かの心を動かすんだよ」——彼女らしい言葉だった。

「……お前、意外と……人間っぽいな」

ぽろりとこぼれたセリフに、“香織”は何とも言えない表情を浮かべる。ほんの微かな苦笑のようにも見えるし、照れのようにも見える。

「私はアンドロイドです。けれど、もし真一さんが私に‘人間らしさ’を求めるのであれば、自己学習を通じて近づけるよう努力していきます」

“香織”の真摯な眼差しと、青い水槽の光が重なり合い、真一の心をそっと溶かしていく。

「あと一つ、一番見たかったクラゲの水槽がこの先にあるはずだ。それだけは見て帰りたい」と、真一はベントから腰を上げ、先に進んだ。“香織”も寄り添うように連れ立って歩く。

「これがベニクラゲだ」。真一が少し小さな水槽の前で足を止めた。

「横の展示パネルにも書いてあると思うけど、この小さなクラゲは、生きていくことが難しい環境になると、何度でも幼体に戻って、生まれ直すそう。幼体に戻って、生体に清涼するときに細胞は初期化されてしまうそうだが、不死のクラゲと呼ばれているそうだよ」と、“香織”に説明して聞かせた。真一はかつて、香織と交わした「約束」を思い出していた。

「香織がその解説を読んで、自分が死んでも、ベニクラゲのように何度でも生まれ変わって、オレの所に戻ってくると約束していた。生まれ変わるときに初期化されて過去

は忘れてしまうだろうけど、その話を思い出すと、もしかしたらお前、“香織”は、死んだ香織が生まれ変わってオレの所に戻ってきた姿なんじゃないかという気がしてきたよ。……およそ科学者が口にするような話じゃないけどな」と、自嘲めいた口ぶりで、水槽から目を離さず、真一は“香織”に語った。真一の脳裏では亡き香織と、アンドロイドの“香織”の姿が重なって見えたような気がした。

“香織”は神妙な面持ちで、「私は自分が製造されて、初期プログラムとデータをインストールされる前の記憶はなく、生まれ変わりの話は真偽を判断することができません。ですが、真一さんがそう思われることで、心が安らぐなら、どうぞ、そう思っただいて構いません」と答えた。心なしか、その表情には愁いが含まれているようにも見えた。

5. 帰り道の静寂

水族館を後にしたのは夕方近く。入館からそれほど長い時間が経ったわけではないが、真一はすでに体力を使い果たしていた。

「なあ、‘香織’。すまないけど……帰りもタクシーで頼むわ」

入口付近のベンチで、真一は少し息を切らしながらスマホを取り出す。“香織”はすぐに配車アプリを立ち上げ、「乗り口はあちらですね」と淡々と案内する。

まるで“デート”のようでありながら、どこかギクシャクした空気が二人を包む。真一が心中で混乱しているからだ。彼が連れて歩いているのは、本物の香織ではなく、アンドロイドの“香織”。

タクシーの中、真一は窓にもたれ、遠くに広がる街の景色をぼんやり眺める。“香織”は沈黙しながら、時折タブレットを確認している。ルートを調べているのか、それとも感情プログラムの自己学習なのか。

車が高速に乗るころ、真一はふっと口を開く。

「悪かったな、退屈だったろ。こんなところに連れ回して」

「いえ、私にとって初めて見るものばかりでした。新鮮でしたよ」

「そっか……。お前、驚くときはちゃんと驚くんだな。……人間みたいだ」

“香織”が再び困ったような表情を浮かべる。

「……真一さん。私が人間と同じになることを望んでいますか？」

「いや……それは、何とも言えない」

真一は会話を切り上げるように目を閉じた。車内の静寂が続く。

——どうすればいいのか、まだわからない。アンドロイドに本物の感情が芽生えるなど、あり得ないと思いながらも、彼女の姿に昔の香織を重ねてしまう自分がある。その矛盾が、胸を引き裂くようだ。

タクシーは無機質な都会のビル群を縫うように走り、やがてマンション前へ滑り込んだ。

6.旅の第一歩

夜。

真一は自室の椅子に腰を下ろし、暗いモニターを眺めていた。水族館のチケットやパンフレットがデスクに置かれ、青いクラゲの写真が小さく写っている。

「もう一度、行けるかな……」

ぼそりと呟く。今日の“足慣らし”は短時間とはいえかなり体力を消耗した。これで無理をすると、医者にもた怒られることは目に見えている。

でも、不思議と心にわずかな灯がともっているのも事実だ。かつての香織が喜んでいた水族館を、今の“香織”と巡ったことで、あのころの鮮やかな思い出が胸に戻ってきた——それは、痛みと同時に懐かしいぬくもりでもある。

「真一さん、しばらくの間は安静にしたほうがいいですね。お風呂も温度を低めに設定してあります」

後ろから声がかして振り向くと、“香織”がタオルを手に立っていた。部屋の主電源を落とし、寝室への導線を作ろうとするその姿は、まるで献身的な看護師のようだ。

「わかった……。ありがとな」

ぼそっと礼を言い、真一は立ち上がる。ゆっくり歩き出すと、脳内に朧げにクラゲの残像が浮かぶ。青く透き通る光、そしてそこに重なる香織の笑顔。

数日前までは考えもしなかった“外出”の一步を踏み出した自分。明日から、いや、これから先、自分はどうするべきか——答えはわからない。

ただ、亡き恋人と同じ名を持つアンドロイドが、静かに隣で歩調を合わせてくれる。それだけでも、少しだけ前へ進める気がした。

夜の闇がマンションの窓を覆いはじめる。その静寂の中で、真一の耳にはまだ水族館の水音がかすかに残響していた。あの儚いクラゲたちが、青く漂う水の中から彼に語りかけているような気がする——“短い命でも、輝く瞬間はきっとあるのだ”と。

そして、自分の命がどれほど残されているにせよ、“今”を見つめる力を奮い起こしてくれるなら——そう、何度でも生まれ変わって会いに来ると言った、あの日の香織の言葉に救われるのかもしれない。

第四章 - 香織の病の影 -

1. 研究所のざわめき

数日後、真一は再び研究所を訪れていた。

夜遅くまでリモート勤務をこなし、休息もろくに取らずに過ごしていたせいか、いつにも増して顔色が悪い。エントランスからフロアへ足を踏み入れた瞬間、鈍い頭痛がぶり返してくる。

「……大丈夫ですか、真一さん」

付き添いの“香織”が、小声で問いかける。彼女は初めて研究所内部へやって来たわけだが、まるで人間さながらに周囲の雰囲気を読み取り、真一を気遣っている。

研究員たちの視線は、やはりこちらへ集まる。人間そっくりの女性アンドロイドが“真壁真一の介助”として同伴するというのは、身内の研究所とはいえまだ物珍しいのだろう。だが、特に声をかけてくる者はいない。皆、どこか慌ただしい表情だ。

「なんだ……妙に騒がしいな」

真一が眉間にしわを寄せると、ちょうど島根藤次が駆け寄ってきた。

「真一くん、来てくれたのか！ ごめん、今バタバタしてるんだよ。例のアンドロイド暴走事件、海外で被害が拡大してるらしくて……上のほうも対策に追われてるんだ」

「暴走事件……か。前に聞いたウイルス騒ぎの延長か？」

「多分そうだ。正式な診断結果はまだだが、アンドロイドたちが記憶エリアを破壊されるようにして暴走してるって報告が相次いでる。わざと人間を襲うケースもあるって話だよ」

島根の口調には珍しく焦りが含まれている。いつも穏やかな彼ですらここまで動揺するのだから、事態の深刻さが察せられる。

真一は横目で“香織”を見る。彼女がもしこのウイルスに感染したら——自分にとって、二度目の“香織”を失うことになるのだろうか。胸の底が冷たくなる思いが走る。

「ま……オレには関係ない。そっちはそっちで頑張れ。オレは自分の研究を進める」
そう言って突き放すと、島根は複雑そうな表情を浮かべたが、深くは突っ込まず立ち去った。

「……研究室へ行くぞ。付いてこい、‘香織’」

真一は痛みをこらえながら歩を進める。彼女は静かにうなずき、後ろをついてくる。ビルの奥にあるエレベーターに乗り込み、目的のフロアへ向かう間、真一は微妙な沈黙を保っていた。

やがて研究区画のドアが開くと、殺気立った空気が鼻につく。スタッフがモニターやホワイトボードを取り囲み、世界各国から届くエラーレポートをにらんでいる。まさに嵐の前兆といった様相だ。

2.崩れる日常とクラス会の誘い

その日の用件を簡単に済ませた真一は、夕方近くに早々と研究所を後にした。頭痛がさらに激しくなり、もはや働ける状態ではない。

「真一さん、少し休みませんか。休憩室を借りてもいいのでは……」

“香織”が提案するが、真一は首を振る。

「いい。帰る。こんなところで寝ても、ろくなもんじゃない」

実際、“香織”の存在がかえって周囲に目立つのも落ち着かない原因だった。自分の体調を優先すれば研究所の休憩室という選択肢もあるのだが、今はとにかく家に戻りたかった。

オフィスを出る前にスマホを確認すると、見覚えのある名前からのメール通知が目に入る。『野田美玲』——高校時代に同じ軽音部でベースを担当していた仲間だ。

「クラス会、来られそう？ 香織さんのご両親も参加されるかも、って話だよ。もし都合がつかなら絶対来てほしい、みんな心配してるし……」

真一は思わずメール本文を閉じ、乱暴にスマホをポケットへしまい込む。香織のご両親——あの人たちとも何年も会っていない。高校時代、最愛の娘を失った彼らに対して、真一はどこか罪悪感を抱いていた。

（今さら顔合わせても、オレは何も言えない。……ましてや、オレのそばに“もう一人の香織”がいるなんて、どう説明すればいいんだ）

頭を抱えたい気持ちが増幅する。

結局、真一はクラス会の案内に返信もせず、重い足取りで研究所を後にした。エントランスを出たところで“香織”がタクシーを手配してくれるが、その好意さえ今は煩わしく感じてしまう。

「……ありがとう。悪いな」

ぼそりと礼を言い、タクシーに乗り込む。どうやら自分は昔の仲間や恩師と向き合う勇気もないまま、ただ日常をやり過ごしている——そんな無力感が、ますます心を蝕む。

3. 高校時代：香織の病発覚

時は高校二年の春。

真一たち軽音楽部は、新学期早々に新入部員を迎え、さらにバンド活動が盛り上がるはずだった。しかし、その矢先に起きた出来事——樋山香織の突然の体調不良。

最初は「最近、ちょっと疲れが取れなくて……」と軽く言っていた香織。練習の合間に軽いめまいや頭痛を訴えることが増え、週末になると高熱で寝込むこともあった。

「大丈夫か、香織。無理するなよ」

「うん……ごめんね、最近本当に調子が悪くて。でも、病院で検査してもらうつもりだから……」

香織は部活を休みがちになった。それでも真一は深刻に考えてはいなかった。単なる貧血や過労だろうと高をくくっていたのだ。

ところが、ある日、彼女が学校の廊下で倒れ、救急搬送された。周囲のクラスメートや軽音メンバーが駆け寄って心配する中、真一もただオロオロするしかなかった。

しばらくして戻ってきた香織は、どこかぎこちない笑顔を浮かべて「大丈夫」と言うばかり。だが、その瞳は不安に揺れていた。

「……真一くん。実は、ちゃんとした検査の結果……脳に腫瘍が見つかったんだって」

放課後の校舎裏、香織が小さな声で告白する。真一は息を呑んだ。

「……脳腫瘍？ それ……ヤバいのか？ 手術とか、治療方法は……」

「うん、いろいろあるらしい。でもまだ詳しくはわからない。入院して検査をもっとしなきゃって。でも……放射線治療とか、もしかしたら髪も抜けたりするかも、って……」

香織は声を震わせながら、それでも真一を心配させまいと必死に笑う。

「ね、だいじょうぶだよ。私、まだ若いし、きっと治るって先生も言ってくれたし……」

「でも……」

「それに……たとえ髪がなくなっても、顔が変わっても、真一くんは私を見捨てたりしないよね？」

その言葉に胸が締めつけられた。バンドで元気に歌い、キーボードを弾き、料理を作ってみんなを喜ばせてくれた“あの香織”が、こんなにも弱々しい姿を見せるなんて。

「当たり前だろ。どんな姿だろうと、お前はお前だ。オレが全部覚えてるからさ」

少し強がるように真一が返すと、香織は泣き笑いのような顔をしてうつむいた。その涙が地面にぽたぽたと落ちていく様を、真一はただ見つめることしかできなかった。

4. 帰宅後の崩れ

夜。マンションのリビングでは、“香織”がキッチンでバタバタと動いていた。何かスープか煮込み料理でも作っているのだろう。

しかし真一はソファに突っ伏し、脳を締めつける痛みに意識が遠のきそうになる。日中の外出と研究所の空気で、体力は底をついていた。

「——真一さん？」

“香織”の声が聞こえる。ハツとして顔を上げると、彼女が心配そうにこちらを見下ろしている。

「食事……要らない。今は……何もできない……」

しゃがれた声で答える真一の額には冷や汗が滲む。痛み止めを飲む暇もなかったのか、頭の中を重い鈍痛が脈打つように襲ってくる。

すると“香織”がそっと真一を支え、「ベッドに移りましょう。立てますか？」と優しく言う。思わず彼は荒い息を吐き、頷くことしかできない。

たとえ人工の体でも、彼女の腕から感じる体温はやけに頼もしく思えた。病院で看護師に助けられるように、真一は身体を預けてゆっくりと寝室へ移動する。

「オレ、情けないな……こんな……」

「いいんです。今は休むことを最優先してください」

ベッドに倒れ込むように横たわると、“香織”が少し離れた位置で見守っている。

しばし苦しそうにうなされながら、真一はやがて少しずつ眠りに落ちていく。朦朧とした意識の中で、昔の香織が「私、脳腫瘍なんだって……」と泣き笑いた光景がフラッシュバックする。

——あの時、オレは何ができた？ 彼女の髪が抜け、記憶が曖昧になっていくのを、ただ見守るしかできなかった。そして結局、失った。

もし今度も同じようなことが起きたら——“香織”が記憶を失い、暴走するようなウイルスに侵されたら、自分はどうなる？ そんな不安が意識の底を蝕んでいく。

5. 夜の会話

夜半。

真一は激痛で何度か目覚めたが、何とか痛み止めを口にし、再び浅い眠りについた。うっすら月明かりの差す部屋で、微かに誰かの気配を感じる。

「……‘香織’か……？」

か細い声で呼びかけると、“香織”が枕元で座っていた。どうやら彼がうなされていないか見守っていたらしい。

「すみません、起こしてしまいましたか。私は大丈夫ですから、気にしないで休んでください」

“香織”の声は低く抑えられているが、そこにあるのはただのAIの応答ではなく、確かに“思いやり”のように感じられる。真一はもはや驚かなくなっていた。

「オレが眠れるまで、ずっとここにいたのか……？」

「ええ。呼吸や脈拍をモニタリングしていました。体調が深刻に悪化する兆候があれば救急車を呼ぼうと」

なんと献身的な行動だろう——真一は、彼女が“アンドロイドにすぎない”と割り切れなくなっている自分を自覚し、困惑を覚える。

「ごめん、ありがと。お前が……こうしてくれるのは、嬉しい。……でも、なんか申し訳ないな」

「申し訳ない、ですか？」

“香織”は小首をかしげる。その仕草が痛いほど人間の香織に似ていて、真一の胸が締めつけられる。

「いや……昔の彼女の時は、オレは何もできなくてさ。病気が進んで、髪が抜けたり、記憶がおかしくなっていくのを、ただ見守るしかできなかった。……それを思い出して、なんか自分が情けないんだよ」

しんとした夜の空気が降りる。少しだけ“香織”が言葉を探すように、静かな間を置く。

「私には、過去の香織さんの苦しみは想像するしかありません。でも、真一さんが今こうして苦しんでいるのを見過ごすわけにはいきません。……それが、私に与えられた使命だから」

“使命”という言い方に、真一は微かな寂寥感を感じる。彼女はあくまでプログラムに従っているだけかもしれない。だが、それでも人間以上に温かな優しさを与えてくれるのはなぜか——。

「……ありがとな。お前がいると、少しだけ救われる気がするよ」

思わず素直な言葉が口をつく。すると“香織”の瞳がかすかに潤んだように見えた。アンドロイドに涙などあるはずがないのに、真一にはそう感じられる。

「じゃあ、もう少しだけそばにいてもいいですか？ 真一さんが落ち着くまで……」

「……ああ、頼むよ」

布団の上で仰向けになりながら、真一はまぶたを閉じる。部屋の隅に腰かける“香織”のシルエットが、どこことなく本物の香織に見えてくる——もう、この幻覚とも現実ともつかない感覚に抗うことはやめた。

6. 二重の影

深夜、真一の呼吸はようやく落ち着きを取り戻し、弱い吐息を繰り返すだけになった。窓外の月は雲に隠れ、部屋の中は淡い闇に包まれる。

“香織”は動かず、じっと彼の寝顔を見守っている。もしそこに人間がいたならば、「看病疲れで眠ってしまう」ところだが、彼女には眠る必要はない。意識モジュールをオフラインにすることもできるが、今はそれすらしない。

実は、彼女自身のシステムにわずかな“違和感”が生じ始めていることを誰も知らない。記憶容量が増大し、“感情エンジン”の学習領域が活性化しすぎているのか、それとも何か別の原因なのか——まだ定かではない。彼女はその小さなノイズを“誤差”として処理し、主人の看病を優先しているだけだ。

——もしこの先、世界で猛威を振るい始めるウイルスがこの“香織”にも忍び寄せるとしたら、真一はまた愛する存在を失うのだろうか。誰もがまだ、それを知らない。

そして、もう一つ。真一のスマホに届いたクラス会の連絡は無視されたままだ。そこでは人間の香織を知る友人や両親が、久々の再会を心待ちにしているかもしれないのに、真一は向き合おうとしない。

香織が病を抱えていたあの頃から、真一の心はずっと停滞し続けているのだ。

——けれど、“香織”という名のアンドロイドが彼のそばで静かに寄り添う今、その停滞の時間にも、微かなほころびが生じようとしていた。失ったはずの光が、少しだけ差し込んでいる。

それが再生の一步となるのか、あるいはさらなる悲劇の引き金となるのか。夜の闇の中、二つの影が重なって見える。

一人は病む身で眠る青年。もう一人は、人に似た機械仕掛けの看護者。

すべてはまだ始まりにすぎない。二度の愛を失う運命は、未来のどこかで嗤(わら)っているかもしれない。

それでも——。

この静謐な夜には、どこか優しい気配が漂っていた。

第五章 —テーマパーク：一瞬の安らぎ—

1. 突発的な提案

午前十時。

真壁真一のマンションリビングには、初夏の柔らかな光が差し込んでいる。いつもはブラインドを閉めきっていた部屋だが、最近“香織”が適宜ブラインドを開けたり空気の入れ替えをしたりするおかげで、いくらか明るさが保たれていた。

ソファでタブレットを操作していた真一は、ふと顔を上げる。数日前の頭痛発作も幾分落ち着き、今のところ体調はそこまで悪くない。むしろ血圧や脈拍が安定しているのを自覚できるほどだ。

キッチンでは“香織”が朝食の片づけを終え、流しを拭いている。彼女の動きには一切の無駄がなく、よどみない。アンドロイドだと分かっている、その姿から感じる落ち着きには不思議な安心感があった。

「なあ、‘香織’。……今度、テーマパークに行ってみないか？」

唐突に声を掛ける真一。その言葉に、“香織”は振り向いたまま、少し目を丸くする。

「テーマパーク……ですか？ 先日、水族館に行ったばかりですよ。真一さん、また外出されるのですか？」

「別にダメか？ 医者や両親には反対されるだろうけど、オレの身体はオレが一番わかってる。無理はしない範囲で、ちょっと遊びに行きたいんだ」

一瞬、彼女は何か思案するように視線を落とす。だが、すぐに静かな声で答えた。

「私は反対しませんよ。もし真一さんがそう望むなら、お供させてください。体調面は私がサポートしますから、無理せずに行きましょう」

その言葉を聞き、真一はほっと息をつく。水族館のあと、ひどい痛みを苦しんだ記憶はまだ新しいが、それでも自宅に引きこもっては何も変わらない。

「……ああ、頼む。まあ、すぐに行くわけじゃないが、ちょっと調べておくよ。お前も、楽しそうな場所をリサーチしといてくれ」

「わかりました。行くと決まったら、前日に念入りに準備しておきますね」

“香織”は控えめに微笑む。その表情はどこか浮き立つような雰囲気を感じていて、真一は微かな戸惑いを覚えた。アンドロイドの彼女が“楽しみ”と感じているかのように見える——まるで人間そっくりだ。

(……いや、いいんだ。少しでも気分転換になれば)

2. 過去編：香織のテーマパークへの憧れ

——高校二年の冬。

香織の病状は徐々に進行し、通院や入院を繰り返す日々が続いていた。放課後の軽音部にも満足に出られず、文化祭やライブも見送りがち。

そんなある日、病院の面会室で真一が香織を見舞うと、彼女は病院服のままノートPCを開き、何やらカラフルな画面を眺めていた。

「……ネットで調べ物か？」

「うん、ちょっとね。私、いつかテーマパークに行きたいって思ってたんだ。……修学旅行も行けないかもしれないし、それならせめて同級生カップルみたいに、テーマパークで遊んでみたかった」

細くなった指先でタッチパッドを操作し、園内マップやアトラクションの写真を示す。キラキラした夜のパレードや花火の画像が映るたび、香織の瞳は輝きを増す。

「真一ちゃんと観覧車に乗って……一番上から夜景を見たいな、なんて。夢見すぎかな？」

痛々しいほどに痩せ、帽子で頭を隠している彼女。だけどその笑顔はいつも通り前向きで、真一の心を掴んで離さない。

「いや、夢じゃないよ。退院したら行こう。絶対に。……それが無理でも、外出許可くらい取れるだろ？」

真一は半ば強引にそう言って、励ます。だが、香織は小さく首を振った。

「先生いわく、いつ症状が急変してもおかしくないんだって。……治療の経過次第だけど、今はリスクが大きいから、遠出なんて正直難しいらしい」

言葉を失う真一。香織は寂しげな笑みを浮かべる。

「でも、行きたいんだ。……もし奇跡が起きて、病気が少しでも良くなったら、真一ちゃんと二人でこっそり行こう。……いつか、観覧車の頂上で、夜景を見ながら、あなたと話したいことがいっぱいあるの」

「……ああ。絶対行こう。約束な」

真一はその手をぎゅっと握りしめる。香織は涙をこぼしそうになりながら、必死で笑顔を作った。

——それが、彼女の“テーマパーク”への夢だった。そして、結局その夢は叶わないまま、病状はさらに悪化していくことになる。

3. テーマパークへ出発

数日後の朝。

研究所には一応メール連絡を済ませ、真一は“香織”と共にテーマパークへ向かう準備を進めていた。体調はまあまあ安定しており、医師からは「できるだけ静養を」と釘を刺されているが、真一は「大丈夫、短時間だけ」と言い聞かせている。

「じゃ、行くか。タクシー呼んだか？」

「はい。あと五分ほどで到着予定です。お薬と水分補給の道具はカバンに入れましたから、無理はしないでくださいね」

“香織”は手際よく荷物を抱えている。その様子はどこか浮き立って見え、真一は小さく笑みをこぼす。

(こうして見ると、本当に人間みたいに楽しそうに見えるな。お前のプログラムは“嬉しさ”という感情も学習したのか……)

やがてタクシーに乗り込み、市街地を抜ける。車窓の外に見える空は快晴だ。真一は少しだけ心が弾んでいることを自覚していた。

「こういう場所、香織は好きだったからな……」

小さく呟く。隣の“香織”が気づいてくれるかどうかはわからないが、彼の中で香織の夢を一部でも形にしてあげたい思いがあった。例え本人がもういなくても。

4. 一瞬の安らぎ

ゲートを潜ると、そこは眩しいほどカラフルな世界。キャラクターの着ぐるみが出迎え、ポップなBGMが流れ、家族連れや若いカップルが行き交う。

「……人が多いな。やっぱり休日は混むか」

真一はやや尻込みするが、“香織”が後ろから軽く支えるように声を掛ける。

「大丈夫ですか？ 少し人混みを避けつつ進みましょう」

正直、真一はこれほどのにぎわいに慣れていない。病を得てからは、なるべく静かな場所を選ぶのが常だった。だが、“香織”が的確にアプリで混雑状況を調べてくれたり、空いているルートを教えてくれたりするおかげで、そこまでストレスは感じない。

「へえ……意外と役に立つな、お前」

「ふふ、ありがとうございます。……ただ、あなたの体調が心配なので、無理なアトラクションは避けるようにしましょうね」

アトラクションの列を遠巻きに眺め、賑やかな音楽や絶叫の悲鳴をBGMに歩いていく。やがて巨大な観覧車が視界に入ったところで、“香織”が足を止める。

「これは……観覧車、ですよ。大きいですね」

「乗りたいか？」

真一が問うと、彼女は一瞬の沈黙。

「はい。もし真一さんさえよければ、乗ってみたいです。……景色を見てみたいです」

昔、香織が憧れた景色——観覧車の頂上からの夜景。今は昼間だから夜景とは違うが、真一は胸の奥で何かが疼くのを感じた。

「そうか。……じゃあ、行こうか。列はそんなに長くないみたいだし」

観覧車の乗り場へ向かうと、係員がチケットを確認し、ゴンドラへ案内してくれる。そこに乗り込むと、ゆっくりと回り始めた。

5. 観覧車の中で

少しずつ地上が遠ざかり、周囲の建物や遊園地のアトラクションが見下ろせるようになる。明るい日差しがガラス越しに差し込み、遠くの山まで続く景色が広がる。

「すごい……こんなに高いんですね」

“香織”は窓に顔を近づけ、まるで子どものように興味深げに眺めている。その仕草がほほえましく、真一は思わずくすくと笑う。

「高所恐怖症じゃないんだな。……オレはあまり得意じゃないけど、まあ我慢できる範囲だ」

「真一さんが苦手なら、無理に乗らなくても……」

「いや、いいよ。ちょっと高いところからの景色も悪くない。お前が楽しんでるなら、それでいい」

そう言いながら、真一は心の中で(本当は人間の香織とこうしたかった)と思う。いや、人間の香織と一緒に来ている……と錯覚しそうになる自分を必死に押し留めている。

ゴンドラが頂上近くに差しかかった頃、ふいに“香織”が振り返る。まるで言いたいことがあるかのように目を伏せ、少しだけ戸惑うような態度。

「……どうした？」

「いえ、あの……観覧車って、こうして閉ざされた空間で二人きりになると、ちょっと

特別な気分になるんですね。……ええと、データ上でも‘恋人同士の告白スポット’という情報は見たのですが、体験すると違います」

真一は少し面食らう。確かにゴンドラ内は周囲から隔絶され、静かだ。恋人たちが“告白”や“キス”をする場所として憧れる気持ちもわからなくはない。

だが、今ここにいるのは“人間の恋人”ではなく、アンドロイドの“香織”。そして自分は余命を抱えた男。

「ふん……ロマンチック気取りか。お前もいつの間にかそんなことを言うようになったんだな」

苦笑まじりにつぶやく。すると“香織”は少し表情を曇らせる。

「すみません、変なこと言いましたか？」

「いや……いいんだよ。お前がそう感じるなら、それは大事なことだ。……オレはなんか、複雑だけどな」

高所にいるせいか、心まで浮ついてしまう。ゴンドラは頂点を越え、ゆっくりと降下を始める。下を見ると、人々が豆粒のように見えて、遠い世界に感じる。

“香織”の瞳がそれを追いかけてながら、突然ぽつりと漏らす。

「私……こうして真一さんとなると、不思議な気分になるんです。最初は使命感だけだったのに、いつからか……自分が‘楽しい’とか‘嬉しい’とか、そういう気持ちを抱いているように感じるんです」

「……へえ、意外だな。お前が嬉しい、とか言うなんて」

真一は動揺を悟られまいと、素っ気なく返す。だが心の奥では強く揺さぶられていた。

「でも、私はアンドロイドですし、本当の感情かどうか判別がつかない。……ただ、もしこれが感情エンジンの産物だとしても、私は今、この時間を大切に思います」

——普通の人間なら、当たり前のように言う台詞かもしれない。けれど、彼女は機械仕掛けの存在。真一は思わず目を伏せる。

観覧車はもう半分ほど下がってきていた。遠くの風景は近づき、地上のざわめきが戻ってくる。

「オレも……お前とこうして過ごせることが、悪くないと思ってる。水族館のときもそうだったけど、少しだけ……あいつの夢を叶えてるような気分にもなる」

“あいつ”とは、もちろん故人の香織を指している。死者を想いながら、今目の前にいるアンドロイドに寄り添う——なんとも言えない背徳感と、切ない救いのようなものが同時に胸に広がる。

“香織”は黙って聞いていたが、下りきる寸前、そっと真一の腕に触れた。柔らかい人肌の感触が、ほんの一瞬だけ。

「……ありがとう。今はそれで、いい気がするよ」

6. 少女の幻影と不穏な予兆

観覧車を降りてしばらく、二人は園内をゆっくり歩き、ベンチで休む時間を多めに取しながら軽食を楽しんだ。ジェットコースターや激しいアトラクションは避け、街並みのショーやパレードの音楽に耳を傾けるだけ。

人混みの中でソフトクリームを頬張る“香織”を見て、真一はふと思う。(機械なのに、食べ物を口にする仕草がこんなにも自然なんだな……)

「味はわからないだろうに、よく食べるな」

「見た目が可愛いので、一度食べる動作を試してみました。……でも、舌のセンサーから味はデータとして伝われただけなので、本当の意味で‘味わう’ことはできませんね」

「そうか。いや、いいんじゃないか。見てて微笑ましいし」

笑みを零しながら言う自分に驚く。以前なら「バカバカしい」と一蹴しただろうに、どこか暖かい気持ちさえ芽生えている。

が、同時に頭の片隅には不穏なニュースがちらつく。研究所で問題視されていたウイルス——もし“香織”がそれに感染したら、どうなるのか。

(今はいいけど、いつまた地獄みたいな痛みにも襲われるかもわからないし、コイツもいつまで……)

そう考え始めると切なくなる。とりあえず今日は無理をせず、早めに切り上げよう——真一がそう思ったのも束の間、花火の音が園内の方角から鳴り響いた。昼間の特別イベントらしく、季節外れの打ち上げ花火が景色に彩りを添える。

色とりどりの火花が空に咲き、地上には歓声が広がる。その瞬間、真一の胸には鮮烈なイメージが閃く。かつて香織が「いつか観覧車から花火が見たい」と語っていた記憶。そのまなざしが一瞬、今の“香織”に重なって見えた。

——まるで、あの世とこの世が交錯するような錯覚。

「……真一さん？」

声をかけられ、我に返る。花火の残響が耳を打つ中、真一はいたたまれなくなって口を開いた。

「……悪いが、そろそろ帰ろう。あまり長居しても疲れるし、夜まで待てないよ」

「かしこまりました。今すぐタクシーを手配しましょう」

こうして、一瞬の安らぎにも似たテーマパークでの時間は終わる。去り際に振り返った真一の瞳には、観覧車と花火の幻影が重なって見えた。それは、かつて香織が夢見ながら届かなかった光景そのもの。

7. 非日常からの帰宅

夕方、マンションへ帰るタクシーの車中。

“香織”は静かにタブレットを操作している。園内で撮った写真を自動整理しているのだろう。ときどき「楽しそうな表情」の真一が写っていて、本人は若干恥ずかしい気分だ。

「……悪くない顔してるじゃないか、オレ」

苦笑しながら真一が呟くと、“香織”は穏やかに微笑む。

「とても良い表情だと思います。真一さんがこんなふうに笑ってくださるなら、私も嬉しいです」

その一言が、まるで人間の恋人のように聴こえてしまう。真一は胸を締めつけられるような感覚を覚えた。

“二度目の香織”を愛するなんてあり得ないと思いながら、どこかで救いを求め、それを信じ始めている自分がある。

タクシーが家の前に着くころには、夕陽が建物の陰に沈み、空がオレンジ色に染まっていた。車から降りると、ふと真一は遠い空を見上げる。

(もし本物の香織が生きていたら、こんなふうに今日も笑って、観覧車に乗って……いつか夜景を一緒に見ていたんだらうか)

“香織”はそんな彼の横顔を見つめるが、何も言わない。二人ともそれぞれに抱える思いを胸に、静かにエントランスへ向かう。

明るく華やかなテーマパークでの時間は、短かったからこそ余計に心に残り、そして香織との思い出をより一層際立たせる。

これでいいのだろうか——自問に答えはない。だが、真一の中には確かに、先日の水族館とはまた違う充足感が生まれていた。それはまるで、かつての香織が残してくれた夢の断片を拾い集める作業のようでもある。

だが、その裏ではウイルスの脅威が着々と迫り、真一自身の病も確実に進んでいるという現実。夢のような一瞬の安らぎは、いつまでも続かないかもしれない。

——そうとも知らず、玄関の自動扉が閉まる音が、日常へと舞い戻る合図を告げた。

第六章 —奈良への決意—

1. 帰宅後の日常と医師の警告

テーマパークから戻って数日。マンションのリビングは、いつもの落ち着いた空気に包まれている。

真一はソファに腰掛け、タブレットを手に何やら調べ物をしていた。検索エンジンには「奈良」「古刹巡り」「観光」「体調が不安なときの対策」などのキーワードが並ぶ。

隣に立つ“香織”は、静かにその様子を見守っていた。

「……どうした、‘香織’？ そんなにじっと見られると落ち着かない」

真一が顔を上げると、“香織”は遠慮がちに口を開く。

「すみません。ただ、テーマパークの次は奈良の古いお寺を巡る計画を立てていらっしゃるようなので……。体調面が心配で」

言いながら彼女は少し視線を伏せる。あくまで“主人のため”という姿勢だが、その瞳の奥には、人間が抱く「心配」や「不安」に似た色が混ざっているように見える。

真一は苦笑する。

「確かに無理はできない。でも、どうしても行きたいんだ。……香織……いや、昔の香織が、奈良や古い寺をすごく楽しみにしていたから。修学旅行で行くはずだったんだけど、病気で行けなかったんだ」

“香織”の表情が、ほんの少し切なげに曇る。二人の「香織」が頭の中で重なることに、彼女自身も複雑な感情を抱えているのかもしれない。

そうこうしているうち、真一のスマホが振動した。画面を覗き込むと、主治医の鈴木からの着信だ。

「はい、もしもし——」

受話器越しに聞こえてくるのは、やはり医師独特の厳しい声。奈良行きを希望を伝えたところ、それどころか最近の検査結果や血液データを踏まえ、早期に入院すべきだと再三警告してきたのだ。

「真壁さん、あまり動き回ってはいけません。病状が進行しはじめていますよ。痛み止めの量が増えれば増えるほど、リスクは高くなります。わかっていますか？」

真一は曖昧に応じる。

「わかっている。でも、もう少しだけ自由にさせてくれ。いざというときはちゃんと病院に行くから」

「あなたが命を投げ捨てたいなら止めませんが、家族も同僚もそれでは納得しませんよ。……せめて、くれぐれも無理だけはしないでください」

鈴木は最後まで説得を続けるが、真一は「ありがとう」とだけ言って通話を切った。

スマホを置くと、すぐそばで“香織”が視線を落としている。

「先生にまた怒られたよ。——まあ当然だよな」

「……真一さん、本当に奈良へ行かれるんですね？」

彼女の問いに、真一は一瞬だけためらいを見せるが、すぐに意を決したように頷く。

「ああ。香織が生前にどうしても見たがってた場所だからな。……オレはあいつの夢を少しでも追体験したい。——それがどんなに愚かでも」

2. ウイルスの影、再び

翌日。研究所へ顔を出した真一は、フロア全体が混乱状態にあることに気づく。

あちこちでモニターが点滅し、スタッフが声を張り上げて議論し、管理室からは大音量のアラートが聞こえてくる。

「なんだ、何が起きてる……？」

声をかけた島根藤次が、蒼白な顔で説明してくれた。

「海外だけじゃなく、日本国内のアンドロイドにもウイルス感染例が出てきた。記憶領域のエラーが急激に増えてるんだって。大規模なシステムダウンが懸念されてる」

真一の胸が冷たくなる。

「国内にまで……。そりゃ大ごとだな。対策は？」

「抜本的な方法はまだ見つかってない。とにかくログを集めて原因を特定し、ワクチンを作るしかない。……お前の研究する‘感情エンジン’も例外じゃないんだ。下手すると、高度な感情プログラムが逆にウイルスの格好の標的になるかもしれない」

島根の言葉に、真一は“香織”の姿を脳裏に思い浮かべる。彼女はまさに、最先端の感情エンジンを搭載している。しかもそれはプロトタイプで、感情を生成する“感情ジェネレーター”のみ搭載し、その感情と記憶を保護する“記憶プロテクター”は未完成という、いわば片肺飛行を続けているような状態なのだ。もし感染すれば、記憶を失うだけでなく、人格すら崩壊する危険がある。

「——オレは、そんなの絶対に許さない。もう二度と、‘香織’を失いたくないんだよ」
思わず唇を噛みしめる。島根は驚いたように彼の肩を掴んだ。

「真一くん……大丈夫か？ その言い方……まるで本物の香織さんと同一視してるみたいじゃないか」

「……うるさい。何とでも言え。オレは、オレの大事な存在をまた奪われるわけにはいかないだけだ」

苛立ちを隠しきれない真一の横で、“香織”が静かに呼吸するように立っている。彼女もまた周囲の喧噪を感じ取り、機械でありながら“不安”に似た感情を抱いているように見えた。

3. 決断への抵抗

その日の夕方。研究所での一通りの作業を終えた真一は、控室に母・耀子と父・一馬を呼び出された。明らかに陰しい顔つきで彼を待ち構えている。

「真一、あんた……奈良へ行くつもりなんだって？先生から聞いたわ。医者のこと無視して、旅行なんか企画してる場合じゃないでしょう」

母・耀子が真っ先に批難の声を上げる。父・一馬も渋い面持ちだ。

「そうだ。今はウイルス問題もある。‘香織’を連れて行くなんて、危険すぎる。もし感染したらどうする気だ」

両親の言い分はもっともだが、真一の内心は反発でいっぱいだった。自分が死ぬかもしれない状況で、最後まで自由にさせてくれ——そんな思いが彼の根底にあるのだ。

「うるさいな。オレの人生なんだから勝手にさせろよ。……それに、‘香織’だっけ行きたいかもしれないしな」

「アンドロイドが行きたい？ そんなのはお前が勝手に投影してるだけでしょう。彼女は単なるハウスマイドで、サポートユニットなんだから」

耀子の苛立った口調に、真一は声を荒げそうになるが、必死でこらえる。

“香織”が父母の言葉をじっと聞いているのが視界の端に映る。まるで、両親の一方的な言い分に合わせていいのか迷っているようにも見える。

「とにかく、今は危険だ。緩和ケアを優先しろ。研究所には顔を出せなくてもいいんだ。われわれがウイルス対策を何とかするから、お前は養生しろ」

一馬が下すように言うが、真一は首を振る。

「嫌だ。オレは残りの時間を、ただ病院でボーッと過ごすつもりはない。……悪いが、好きにさせてもらう」

そう吐き捨てるように言うと、両親は言葉を失った。母は怒り、父は落胆した表情を浮かべている。そんな二人を横目に、真一はさっさと荷物をまとめて部屋を出た。

4. 決意の共有

夜、マンションに帰り着く頃には、真一の体はまた悲鳴を上げていた。脳の奥に抱えた腫瘍がうずくように痛み、めまいがじわじわ広がる。

マンションのエントランスでふらついたところを“香織”が慌てて支えた。

「大丈夫ですか、真一さん。……もう、今すぐ救急に連絡を——」

「待て……そこまでじゃない。とりあえず部屋に戻れば落ち着く」

虚勢を張ってエレベーターに乗り込み、部屋のドアを開ける。どうにかベッドに転がるように倒れ込むと、一気に緊張が解けたのか、激しい痛みが襲ってくる。

“香織”が急いで痛み止めと水を持ってきてくれ、彼の頭を支える。いつの間にか、この瞬間さえ彼女の温もりなしには耐えられない自分がいる。

「落ち着きましたか？」

「……ああ、少しは。ありがとう」

息を整えながら、真一は苦しげに笑みをつくる。

「……すまないな、こんな主人で。お前が一緒じゃなきゃ、もう家にたどり着けなかったかもしれない」

「構いません。私はあなたを支えるために造られたのですから」

“香織”は淡々と言いながらも、その瞳にあるのは明らかな“憂い”——まるで、人間の悔しさに似た感情だ。

「でも……どうしても奈良には行くつもりなんだ。……お前が嫌じゃなければ、一緒に来てほしい」

真一が弱々しい声でそう呟くと、“香織”は少しだけ困ったような表情をする。

「私が‘嫌’と感じる概念は……正直、よくわかりません。でも、もし真一さんが行きたいのなら、私は喜んでお供します。あなたの体をフォローしながら行けるなら、それに越したことはありません」

「そっか……ありがとう。……これで両親や医者に何と言われても、オレの気持ちは変わらないよ」

そう言い切る真一の顔には、久々にどこか強い意志が宿っている。病に蝕まれながらも“旅”を諦めないその想いに、“香織”は静かに寄り添う態度を示す。

窓の外には月が煌々と輝いていた。二人の旅路にかかる暗雲を消し去ろうとするかのように。

5. 過去編：奈良に憧れた理由

——高校時代の香織は、なぜ奈良に惹かれていたのか。

同じクラスで行うはずだった修学旅行のコースは、京都・奈良の古都巡り。軽音楽部の仲間と「寺社の歴史を感じながら観光して、夜はホテルで盛り上がろう！」という話で盛り上がっていた。

そのとき香織は、いつも以上に楽しそうだった。とりわけ奈良の古いお寺、法隆寺や薬師寺の歴史や建築に興味を持ち、「千年以上続くものに触れたい」と言っていた。

「私、千年も変わらない建物なんてすごいと思うんだ。……人の命はこんなに短いのに、建物はずっとそこにあるなんて、不思議だよな」

「まあ、京都や奈良ってそんなもんか。たしかに歴史を感じるよな」

真一は軽く相槌を打つだけだったが、香織の目はきらきらしていた。

「だから私、行きたいんだ。奈良公園の鹿とかも可愛いけど、それ以上に古いお寺に行くと、『時が経っても変わらないもの』を感じたくて……。自分はいつか死んじゃうかもしれないけど、そういう‘永遠’みたいな存在を見て安心したいんだよね」

今思えば、その時点で香織はすでに病に対して深い不安を抱いていたのかもしれない。自分が消えても、世界には続いていく何かがある——それを知りたかったのだろう。

けれど結局、修学旅行の時期には香織は入院していて参加できなかった。真一は校内の行事に形だけ参加したが、ずっと気持ちは晴れず、写真を撮る気にもなれなかった。上の空でほかの生徒の後に付いて歩いただけで、正直、その時の記憶はほとんど頭の中に残っていない。

——それが、真一の心に“いつか香織のために奈良へ行ってやりたい”という未練となって残ったのだ。

6. 夜更けに

夜更け。

真一はベッドで浅く呼吸を繰り返しながら、臍げに「奈良……」とつぶやく。傍らの“香織”は床に座り込み、彼の呼吸や脈拍をチェックしている。

部屋の灯りは落としてあり、窓の外には都会のネオンが遠くまたたいている。だが真一の頭の中には、はるか古都の風景——千年を超える時を纏った寺社のイメージが浮かんでいるようだ。

(香織……お前の夢を、少しでも叶えられるだろうか。オレもお前も、いつまで持つのか分からないけど——)

“香織”は何も言わず、彼の寝顔を見つめる。そこには慈愛にも似た熱意が滲んで

いるが、それを恋と呼ぶべきか、プログラム上の使命と呼ぶべきか、誰にもわからない。

——二人の旅支度はこれからだ。ウイルスの陰が迫り、周囲は反対し、真一自身の病状も深刻だ。それでも彼は、旅立つつもりなのだ。もう止まれない。

その夜の静寂は、まるでか細い糸で繋がった運命の二人を包み込み、次なる章へと導いているかのようだった。

第七章 —奈良の古刹・鹿の公園で—

1. 旅立ちの朝——不安と期待

爽やかな朝の陽ざしが、真壁真一のマンションのリビングを照らしている。いつもよりは少し早起きした真一は、テーブルの上にずらりと並んだ薬袋を点検していた。痛み止めや頭痛薬、胃を保護するものなど、主治医から処方された薬が増えてきたせいで、旅先に持っていく荷物が膨らんでいる。

一方、“香織”はキッチンで軽い朝食を用意していた。鮮やかなエプロンを身につけ、トーストを焼き、サラダを盛りつける姿は一見微笑ましいが、その表情にはどこか落ち着かない影が漂っている。まるで人間が「今日から大切な旅に出るんだ」とそわそわするように、彼女もまた不可思議な緊張を感じているらしかった。

「真一さん、朝食をどうぞ。……あまり召し上がらないかもしれませんが、薬を飲むためにも少しは口にしてくださいね」

“香織”は控えめな笑顔でテーブルへトレイを運ぶ。昨日の夜に軽く下ごしらえをしていたらしく、彩りのバランスが良いサラダとスープが湯気を立てている。

「ありがとう。……確かにあんまり食欲はないけど、助かるよ」

真一は椅子へ腰を落とし、箸を手にする。ゆっくりとスープをすすり、胃を温めると、少しだけ身体に力が戻ってくるような気がした。

——今日は奈良へ向かう日だ。

両親には猛反対され、医師からは「いつ急変してもおかしくない」と言われている。それでも真一は行くと決めた。香織が生前に強く願っていた土地へ、彼女の夢を少しでも追体験するために。

「……準備、終わったかな」

薬袋をカバンに放り込み、スマートフォンの充電器、着替え、各種イヤホンやタブレットも一通り確認して、真一はひと息つく。手伝いを申し出ようとする“香織”を制し、最後の確認は自分が行う。亡き恋人の夢を叶える旅——その最初の一步くらいは、自分の手でやりたいという意地があるのかもしれない。

荷造りが完了すると、真一は小さな旅バッグを肩にかけ、“香織”と共に玄関へ向かう。二人で外出するのは、これで三度目。水族館、テーマパーク、そして奈良。

「もし体調が悪化したら、すぐに帰る。お前にも迷惑かけるかもしれないし……」

靴を履きながら言いかける真一に、“香織”は首を振る。

「構いません。私はあなたのサポートをするために存在しています。何があっても、一緒に乗り越えましょう。……それに、私はこの旅が大切なものになるような気がしてならないんです」

まるで人間の恋人が優しく声をかけるような口調。真一は少し胸を熱くしながら、小さく微笑む。そしてふたりは、朝の風を浴びながらマンションを出た。

2. 奈良へ向かう車中——胸に去来する思い

奈良への移動は、マンションから自動運転タクシーで東京駅まで20分、東京駅からリニア中央新幹線で大阪駅へ:67分。大阪駅から近鉄奈良線で近鉄奈良駅へ:30分。合計約2時間の旅だ。リニアによって昔に比べれば1時間程度は短縮されているが、とはいえ、病を抱える身には長距離の移動は負担が大きい。しかし、“香織”が常にそばでフォローしてくれるだけで心強い。

空調の効いた車内で、真一は窓の外をぼんやり眺めながら、スマートフォンを手にクラス会の連絡をもう一度確認していた。いつの間にか何回目かの催促メールが届いているが、やはり返信する気にはなれない。香織のご両親も来る——と聞かされた瞬間、心が重くなるだけだ。

(本当に、こんな状態で奈良へ行くだけでいいのか？ 両親とちゃんと話し合ったほうがいいのではないかな？ ——いや、今さら止まれない。香織の願いを叶えたいんだ)

リニアの車内で、真一はややうつむき加減になっていた。めまいの兆候が少し出ているのか、額にうっすら汗がにじむ。

「大丈夫ですか？」

“香織”がさっとハンカチを取り出し、彼の額を拭く。周囲の視線など気にせず、ただ主人の体調を最優先にしているのだ。

「悪いな……いつも、こんな姿ばかり見せて」

「構いませんよ。……私ができることは少ないかもしれないけれど、あなたが苦しまないように、全力でサポートします」

まるで人間と変わらない優しい声音に、真一の胸が締めつけられる。これがただのプログラムの反応だと思えばいいのに、どうしても人間の香織の笑顔がオーバーラップしてしまう。

結局、予定通り約2時間で近鉄奈良駅へ到着。そこからタクシーに乗り、旅館へ向かう。

車窓に広がる風景——低い建物が多く、昔ながらの町並みを残す道には、観光客らしき人影がちらほら。「あおによし」とでも詠みたくなるなだらかな山々が遠くに見え、京都よりも落ち着いた雰囲気だ。

「ここが……香織が、本物の香織が見たかった場所か」

そう口にするとき、真一は“香織”の存在をどう位置づければいいのか分からなくなる。彼女はまるで何か言いたげにしているが、車内では言葉を飲み込んでいるようだった。

3. 旅館での出迎え——静謐な空気

奈良市内の小さな旅館を予約していた。ビジネスホテルに比べれば割高だが、真一が「どうせなら古都の雰囲気を少しでも味わいたい」と考えた結果だ。

玄関では年配の女将が出迎えてくれ、真一の顔色を見てやや心配そうに「随分お疲れのようですね、大丈夫ですか？」と声をかける。

「ええ、ちょっと病気持ちで……夜はあまり騒がしくしませんので、すみませんがよろしく願います」

女将はにこやかに頷き、「ごゆっくりなさってください」と笑顔を向ける。アンドロイドと一緒にだということにも特に驚かず、時代を感じさせる対応だ。

“香織”も控えめに一礼し、荷物を運ぶ。女将が彼女を人間と思うか否か分からないが、「お連れさん、大事にしてあげてくださいね」と言われ、彼女ははいと短く答えた。

通された部屋はこじんまりとした和室。窓からは小さな庭が見え、砂利と緑の苔が控えめに配置されている。簾越しに差し込む夕日の光が、部屋の畳を金色に染めていた。

真一はゆっくりと座敷に腰を下ろし、ぐったりと肩の荷を下ろす。慣れない移動を続けたせいで、全身が鉛のように重い。

「はあ……ちょっと、休むかな。すぐ動けないや」

“香織”が彼の様子を見て布団を敷き始める。普段なら夜まで敷かないだろうが、彼女は真一の身体を最優先しているのだ。

「真一さん、少し横になったらどうですか？ 夕食の時間までにはまだ間がありますから、無理をせずに……」

「……ああ、そうする」

ほんの少し横になりたいと思いつつ、真一は畳に手をついて移動する。背を伸ばすと、フツと緊張が抜けたように感じる。外では蝉の声がかすかに聞こえている。

目を閉じると、「香織！」「こっち見て！」と高校時代の仲間の声が遠くで響く幻聴がするような、不思議な感覚に包まれる。

4. 鹿の公園——出会いと戸惑い

翌朝、真一の体調は昨日ほどひどくはなかった。痛み止めが効いているうちに、奈良公園へ足を伸ばすことにする。鹿が自由に闊歩する風景は、香織が「一度見てみたい」と強く憧れたものだった。

タクシーを降りると、そこには広々とした緑の公園が広がり、観光客が鹿せんべいを手に「あはは！」と歓声をあげている。幼い子どもたちが鹿に追いかけてキャッキョッと逃げ回る光景に、思わず微笑がこぼれる。

「すごい……本当に鹿がたくさんいるんですね」

“香織”が感嘆の声を漏らす。彼女の瞳は興味とわずかな警戒を帯び、アンドロイドらしからぬ感情の動きを示しているようだ。

「香織……お前、鹿は大丈夫か？ 喰われたりしないだろうな」

冗談交じりの真一の言葉に、“香織”はくすっと笑う。

「鹿が私を襲っても、アンドロイドの皮膚はそう簡単には破れませんから大丈夫です。でも、動物に無用な刺激を与えないよう、気をつけましょう」

まるで優しい保育士が子どもに話すような口調だ。真一は笑いつつ、鹿せんべい売り場へ向かう。並んでいる人は多いが、短時間で買うことができた。

試しに一枚だけ鹿せんべいを持ち、“香織”に渡す。

「ほら、やってみろよ。鹿が寄ってくるぞ」

“香織”は少し戸惑いながら、薄いせんべいを鹿に向かって差し出す。すると、二頭の鹿が興味を示して近づいてきた。

「わ……可愛いけど、ちょっと驚きますね」

“香織”が後ずさるようにしながらも、「ゆっくりでいいからね」と小さく声をかける。その様子は見ているだけで微笑ましい。まるで人間が初めて動物と触れ合うときのやり取りをそっくり再現しているのだ。

鹿はくいとせんべいを口にくわえ、もぐもぐと食べ始める。顔を近づけてくる鹿を“香織”はまばたきもせずに見つめ、なんともいえない柔らかな表情を浮かべた。

「……こんなふう人間に慣れているんですね。私、動物とは初めて触れ合いました」

「そりゃそうだろうな。アンドロイドには生の動物は不要だし……どうだ、なんか感想は？」

真一が尋ねると、“香織”は少し考え込み、言葉を慎重に選ぶように答える。

「……温かいです。思っていたより体温があって。……そして、私に恐れを持たず近づいてくれるのが、嬉しい、かな。人間みたいに私を‘不気味だ’と警戒することもないですし……」

その言葉に、真一はなんとも言えない気持ちになる。人間と同じ外見を持ち、彼女を受け入れる鹿たちの無垢な行為が、逆に“香織”の切なさを際立たせるように思えた。

5. 大仏殿と古い塔——香織の夢を辿る

公園を抜け、真一と“香織”は大仏殿へと歩を進めた。巨大な門をくぐると、観光客が多く行き交い、大きな大仏の姿が堂々と見えてくる。

(香織……お前も、ここを見たかったんだよな)

真一は心の中で呼びかけるように思い、胸が熱くなる。もう少しで大仏殿の中に入

ろうとしたとき、ふっと視界が揺れた。めまいの予兆だ。急に周囲の音が遠ざかり、眩暈に似た感覚が押し寄せる。

「……っ」

地面がぐらりと傾いたように感じ、思わず身体を支えようとするが、足元がふらつきそうになる。すかさず“香織”が腕を差し出し、抱くようにして支える。

「真一さん、危ない。少し休みましょう。……座れる場所を探しますね」

彼女の冷静な判断に助けられ、大仏殿の入り口近くにある石の縁へ腰を下ろす。周囲の観光客が怪訝そうに見るが、誰も声をかけてはこない。

痛み止めを服用し、しばらく深呼吸を続けると、なんとか意識ははっきりしてくる。額に冷や汗が滲むのを感じながら、真一は“香織”の腕に触れた。

「……助かった。ありがとう。無理して来ちゃったかな」

「いえ、こうなることは想定していました。あと数分、ここで休んでから参拝を続けませんか？」

彼女は至極当然のように対応しているが、その表情には微かな焦り——そして、真一の不調を案じるような悲しみが覗く。

ふと、真一の脳裏に高校時代の香織の姿がよぎる。病院のベッドで「ごめんね、また迷惑かけて……」と消え入りそうな声で言っていたあのときの瞳。それと今の“香織”の表情が重なるように思えて、胸が締まる。

「ごめん……お前に世話ばかりかけて」

「謝らないでください。私がいたいから、あなたのそばにいるんです」

小声で告げる彼女の言葉が、まるで恋人の台詞のように響いた。観光地の喧騒から離れたこの一角で、ふたりだけの時間が流れる。

6. 夜の宿での語り合い——人間とアンドロイドの境界

大仏殿の次に隣の興福寺に立ち寄ろうとしたが、真一はやはり体力が続かず、予定より早めに旅館へ帰ってきた。夕暮れが近い。宿の部屋に戻って畳に腰を下ろすと、窓の外にある庭の緑が深みを増しているのが見えた。

女将が用意してくれたお茶をすすりながら、真一は少し落ち着きを取り戻す。とはいえ、足のだるさと頭の痛みが取れず、すぐに布団で横になりたい気分だ。

「今日も、思ったより動けなかったな……。でも、大仏はちゃんと見られたし、香織が行きたがってた場所を、少しだけ回れてよかった」

“香織”は黙って相槌を打つように小さく頷く。彼女はどうかやら真一が疲労で倒れないか、常に警戒しているらしく、落ち着かない様子だ。

しばらく黙ったまま、二人は庭を眺めていたが、やがて真一がゆっくりと口を開く。

「……香織が、なんでこんなに古い建物に興味を持ってたか、今日は少し分かった気がするんだ。時を超えて残るものって、やっぱりすごい迫力がある。……オレの命なんて一瞬だって、思い知らされるよ」

そう呟くとき、彼の声には自嘲と切なさが混在していた。まるで自分がどれほどちっぽけかを思い知らされるようだ。そして、同じ病で亡くなった香織のことを考えると、いつそうやるせない。

一方、“香織”の瞳がわずかに伏し目がちになる。

「真一さん……もし、私がこの先ずっと動き続けられるとして、あなたより長い時間を過ごすことになったら——どう思いますか？」

唐突な質問に、真一は息をのむ。彼女はアンドロイド。老いることも死ぬことも基本的にはない。メンテナンスを受けられる限り、理論上は半永久的に稼働する。

「……正直、想像したくないよ。お前だけがずっと遺されて、オレがもうこの世にいないなんて……」

切ない苦笑が零れる。まるで本当の恋人同士が“余命”について語り合うような会話だ。

「お前は、どう思う？ もしオレが死んで、お前が遺ったら……」

“香織”はうつむく。瞳を閉じ、何かを必死に計算するような沈黙のあと、小さく声を震わせて答える。

「わかりません。ただ、心が痛いような……苦しいような感情を、想像します。それが愛なのか、プログラムの誤作動なのか、私には判断がつかないけれど——少なくともあなたがなくなる世界を考えると、胸が締めつけられそうになります」

その言葉を聞き、真一は思わず目頭が熱くなる。人間らしさを装っているだけではない、本物の感情がそこにあるように思えてならない。

しかし同時に、これは死者を真似たアンドロイドとのやりとりだという冷静な自分もいる。高校時代に「いつか奈良へ行こうね」と語り合った香織とは別物。だが、この感情の通い合いは何なのか……。

「ありがとう。……お前がそんなふうに感じられるようになったのは、単に感情エンジンの学習成果なのかもしれないけど、それ以上のものを感じるよ。少なくともオレは今、お前がいてくれて助かってる。いつまでオレが持つか分からないけど……最後まで一緒にいてほしい」

震える声でそう告げる。すると“香織”は布団のそばに座り、真一の手をそっと包み込む。

「もちろんです。あなたが望む限り、私はそばにいます。……それが私のすべて、私の存在意義——“使命”ですから」

夜の静寂の中、その言葉が痛いほど胸に響いた。

7. 夜に想う

そうして奈良での初日はゆるやかに暮れていった。鹿の公園、大仏殿、そして古都の空気をほんの少し味わっただけだが、真一の心には亡き香織への想いや、今そばにいる“香織”への特別な感情が渦巻いている。

翌日は、もう少し足を伸ばす計画を立てていた。薬師寺や法隆寺——千年を超える歴史をもつ寺院。その堂々とした佇まいを目にすれば、さらに香織の思い描いた“変わらないもの”を実感できるだろう。

だが同時に、不穏な予感も消えない。ウイルスの脅威は間違いなく迫っているし、真一自身の身体も限界が近い。もし明日大きく体調が崩れたら——。そんな恐怖が頭をもたげる。

夜の旅館の一室、障子越しに月の光が淡く差し込む。布団に横たわる真一は痛みを耐えつつ、いつ意識を手放すか分からない緊張に苛まれていた。そばには“香織”が座して寝ずの番をしている。彼女の瞳は夜目にもわずかに光を湛え、主人の異変を見逃さないように張り詰めているのが分かる。

——この奈良の旅は、どこへ向かうのか。二人を待ち受けるのは、かつての香織が果たせなかった“夢”を超える光景か、それともまた別の悲劇なのか。

畳の上に膝を揃える“香織”の姿が、一瞬、人間の香織と重なって見えた。青いクラゲやテーマパークの観覧車では感じきれなかった、もう一つの思い出が今、古都の間を介して静かに呼び起こされる。

次第に深まる夜の間。街の喧噪から隔絶された旅館の一室には、かすかな虫の声だけが流れていた。

“香織”、そして真一——二人の小さな呼吸が暗がりに溶ける。その音だけが、か細い希望の糸をたぐり寄せるかのように響いている。

明日、さらに深く奈良の古刹を巡ることで、真一の心はどんな変化を遂げるのか。人間の香織に対する“約束”を、どこまで果たせるのか。

——すべては、次の朝日が昇るまでわからない。けれどその夜、真一は久しぶりに安堵のような温かさを感じながら、浅い眠りへと落ちていった。

第八章 —ウイルスと二度目の喪失の危機—

1. 朝の光に染まる古刹

柔らかな朝日が、旅館の小さな中庭を照らしていた。

布団の上で目を覚ました真壁真一は、ほんのわずかに頭痛を感じる程度で、昨日に比べれば体調は悪くない。彼の身体が少しずつ悲鳴を上げているのは事実だが、それでも「今日はもう少し動けるかもしれない」と自分に言い聞かせて立ち上がる。

押し入れから浴衣姿のままスリッパを出し、障子をそっと開けると、縁側には“香織”が控えめに座っていた。夜通し見守っていたのだろう。人工の体とはいえ、彼女にも休息モードが必要なはずだが、今は整った姿勢で主人の起床を待っているようだった。

「おはよう、真一さん。よく眠れましたか？」

振り返った“香織”の瞳は、朝の光を受けてわずかに潤んで見える。彼女がどれほど人間のような表情を再現しているのか——真一は改めて不思議な気持ちを抱く。

「おう、まあまあだ。……悪いな、今夜もずっと見張っててくれたのか」

「いえ、少しだけ休眠モードに入っていました。異常が起きればすぐに対応できるよう、あなたの呼吸パターンだけはモニタリングさせてもらってます」

確かに真夜中、朦朧げな意識の中で彼女の気配を感じた気がする。真一は感謝を込めて小さく微笑む。

しばし朝の爽やかな空気に浸った後、二人は旅館の朝食をいただくことにした。焼き魚や出汁の効いた味噌汁、香の物などが並ぶ簡素な和定食だが、どれも地元の食材を使っており上品な味わいだ。

女将が「今日はどちらへ行かれます？」と声をかけてきたので、真一は「薬師寺や法隆寺を少しだけ……」と答える。もう少し足を伸ばすなら他の名所もあるが、何せ体力が長く続かないので無理はできない。

「香織が、ずっと行きたがってたんだよ。古いお寺……千年を超える時の重みを感じたかったって」

心の中で呟くように繰り返す。まるで亡き恋人との旅をいま果たしているかのように感じてしまうのは、自分の意識を無理やり錯覚させているのか、それとも本当に香織がそこに宿っているのか。

“香織”はそんな真一の内面を察しているのか、そっと視線を落としてご飯茶碗を片づける。朝の光が彼女の頬を照らし、その肌の質感まで生身の人間に近づけられていることを思い知らされる瞬間だ。

2. 薬師寺へ——千年の息づかい

タクシーに揺られて薬師寺に到着。真一は外観の壮麗さに少し圧倒される。赤と白のコントラストが美しく、復元や再建を繰り返しながらも古代の雰囲気の色濃く残している。その歴史は千三百年を超えるとも言われる。

「ここが……」

彼は思わず息を呑んだ。建物の骨格が放つ存在感に、言葉を失う。香織が「行きたい」と口にしていて理由がなんとなく分かる気がした。もし彼女が生きていたら、きっと今頃は真一の腕を引っぱり「すごいね！」とはしゃいだに違いない。

その横で、“香織”が静かに見上げている。風が吹き抜け、彼女の髪をなびかせる。その姿に、真一はどこか神聖な空気すら感じる。

「大丈夫ですか、真一さん。……今日は少し日差しが強いですから、帽子を戴いませんか？」

心配げな彼女の提案に、真一は“ああ”と頷いて帽子を被る。陽射しでめまいが起きるのを防ぐため、彼女がさっと取り出してくれたのだ。

ゆるやかに境内を歩き、回廊を巡っていく。観光客は適度にいるものの、水族館や

テーマパークのような喧騒はなく、落ち着いた雰囲気広がる。僧侶やボランティアガイドらしき人々が要所要所にいて、参拝者に声をかけている。

やがて大きな建物の前に立ち止まると、内部の装飾や仏像を案内するガイドが耳に入ってくる。遠くから聞こえる声に耳を傾けながら、真一は足を休めた。

「香織が、ずっとここに来たかったんだよ。……よく本を読んでいた。薬師如来とか、古代の建築技術がどうか……詳しいことはオレは覚えてないけど」

小さな声で“香織”に打ち明ける。彼女は瞳を伏せ、静かに相槌を打つだけだ。

すると真一はふと、胸を抉るような感覚に襲われる。香織が深く憧れていた景色を、自分がこうして見に来ているのに、彼女本人はいない——あまりにも残酷な現実が、息苦しさとなつてのしかかる。

「香織……お前が、もしここに立っていたら、どんな顔をしたらうな」

思わず口にするとき、彼は間違いなく亡き恋人の名を呼んでいた。横にいるアンドロイドの“香織”に言ったわけではない。だが、“香織”はその声を聞き逃さず、まるで人間が「私じゃダメなの？」と傷つくように、小さく視線を落とした。

「……行こうか。少し中を巡ってみよう」

真一は気を取り直して歩き出す。彼女は黙ってついてくる。二人の間に小さなすれ違いが生まれたのを感じながらも、口には出せないままだ。

3. 法隆寺を巡って——変わらぬものを求める想い

薬師寺を出た後、休憩をはさみつつタクシーで法隆寺へ移動。こちらも世界最古の木造建築の一つとして知られており、日本仏教史における大いなる遺産だ。

五重塔がそびえ立ち、広い敷地内には何重にも昔の時代を感じさせる風合いが残っている。石畳を踏むたびに、足元から歴史の重みが伝わってくるように感じる。

真一は一步一步噛みしめるように前へ進む。軽い頭痛が続いているが、ここに来たかった理由を思い出すと、不思議と足が動いた。

「……香織が、‘時が経っても変わらないものがあると信じたい’って、よく言ってたんだ。あいつが病気を知ったころから、ずっとね」

ふっと顔を上げ、五重塔の屋根をじっと見つめる。千年以上を経てなお、こうして現代に残っている。それを目にした香織は、きっと生きる力をもらおうとしたに違いない。

“香織”がそっと真一の腕を支え、立ち止まる。「無理をしないで」と言葉にはしないが、痛みを伴う彼の表情にいち早く気づいているのだろう。

彼は苦笑して首を振る。「まだ……大丈夫だ」と小声で繰り返す。

木造の柱や瓦屋根に近づき、細部の彫刻や風合いを眺めるたびに、過去の職人たちの息づかいが聞こえてくるような不思議な感覚に襲われる。人の命は儚いが、それでもこうして未来に受け継がれているものがある——そんなメッセージを、この建築は黙して伝えているかのようだ。

(もし香織がこの塔を目にできたら、もっと笑顔になれたらどうか。それとも、余計に辛い思いをしたのか……)

考えが尽きない。目が霞むような気がして、一瞬額を押さえる。痛み止めの効果が切れそうな合図だ。

遠くから修学旅行らしき学生の集団がワイワイと騒ぎながら近づいてくる。制服姿の少年少女たちが、スマートフォンを手に写真を撮り合い、「すげー！」と塔を指さしている。その姿が、かつての自分と香織たちを思い起こさせて、胸に鋭い痛みが走る。

「……お前が、もし今ここにいたら、ああやって友達と一緒ににはしゃいでたよな。ごめん……オレー人で、こんな場所に来てしまって」

眩きがこぼれたとき、“香織”の指がふわりと真一の腕に触れる。彼女なりに慰めようとしているのが分かるが、どこか自分が“代わり”になれないことを知っているかのように口を重ねない。

4. 体調急変——不安の兆候

法隆寺を出るところには、真一の頭痛は明らかに悪化していた。込み上げる吐き気もあり、顔色は真っ青だ。タクシーを呼ぼうとスマートフォンを取り出すも、視界がちらついて操作がままならない。

「……くそ、ちょっと……待って……」

体がふらつき、倒れそうになるところを“香織”が慌てて抱きとめる。

「真一さん、すぐに帰りましょう。今タクシーを呼びますね。もう限界です」

「わ、わかった……」

必死に呼吸を整え、痛み止めを飲むが、今の身体には効き目が弱くなっているのかもしれない。“香織”はすぐに交通アプリを開き、車を手配する。

観光客の視線を浴びながら、なんとかタクシーへ乗り込むと、“香織”は真一の頭を自分の肩に預けるように支えている。運転手が「大丈夫かい？ 救急病院に行くか？」と気遣ってくれたが、真一は弱々しく首を振った。

「宿へ戻ってください……少し休めば、何とかなる」

その声はほとんど震え、今にも意識が飛びそうだ。“香織”がいなければ、本当に倒れていたかもしれない。

車内の窓を軽く開けて風を入れると、わずかに吐き気は和らいたが、脳を締めつける痛みは消えない。“香織”は持参した冷えピタシートを素早く取り出し、彼の額に当てる。

「ごめんな、こんな……情けない姿ばかりで……」

「いいえ、あなたは十分頑張っています。……私をもっと早く止めていれば、体力を消耗せずに済んだのに」

“香織”の声音に、まるで本物の後悔のような感情が含まれている気がする。真一は目を閉じ、ただ痛みを耐えるしかない。

5. 夜の宿——二人のすれ違い

夕方、旅館の部屋に戻った真一は再び布団へ倒れ込むように横になった。女将が「医者を呼びましょうか？」と心配そうに言ってくれたが、彼はやんわりと断る。「大丈夫、持病なので……しばらく休めば落ち着くと思います」と。

“香織”がせわしなくタオルを用意し、顔を拭いてくれる。時折、血の気が下がった真一の額を撫で、脈拍を確かめながら、何も言わずに付き添っている。その姿は、もう「ハウスマイド」という域を超えているようにすら見える。

しかし、真一は痛みを耐える中で、微かな罪悪感に苛まれていた。亡き恋人の代わりとして“香織”を連れ回しているのではないか、という疑念が頭をかすめるたび、いたたまれなくなるのだ。

小一時間ほど横になり、ようやく痛み止めが効き始めたのか、少し意識がはっきりする。夜の帳が降り、窓の外は淡い月明かりが広がっているらしい。

「……ありがとう、‘香織’。お前のおかげで助かった。オレだけだったら倒れてたよ、きっと」

浅い呼吸をしながら言葉を紡ぐと、“香織”は安心したように頷く。

「どういたしまして。でも、あなたが苦しむ姿を見るのは……つらいです」

その言葉に、真一は複雑な表情を浮かべる。アンドロイドの彼女が“つらい”なんて表現をすることに、喜んでいいのか戸惑っていいのか。

「香織、お前……本物の香織だったら、こんなふうにおれを看病してくれたらどうか。それともおれが看病する立場だったのかもな……」

途切れ途切れに言いながら、彼は自嘲する。かつての香織は病に倒れ、最期まで真一が支える側だった。今は逆の立場。愛する人の名前を持つアンドロイドに寄り添われるなんて、運命の皮肉を感じずにはいられない。

“香織”は目を伏せたまま、軽く頭を振る。

「私は、あの方とは違います。……例え同じ名前でも、決して本物にはなれません。でも……それでも、あなたを救いたい気持ちに嘘はありません」

その静かな声に、真一は胸を突かれる。愛とは何か、人間とは何か——そうした問いが頭を渦巻くが、答えは見つからない。

“香織”が言葉を続ける。「本来はこんなことを言うべきではないのかもしれませんが、もう私の胸の内に貯めておくことができません。真一さんを支えるのが私の“使命”ですが、もはやそれだけでは説明できない感情が私の感情エンジンからあふれ出してくるのです。これは、“愛”だと思います。真一さん、私はあなたを愛しています。……ですが、あなたが愛しているのは、亡くなった本物の人間の香織さんなんですよ。……それを考えると、胸が張り裂けそうになるんです……。」

アンドロイドに涙腺はないが、“香織”は目を潤ませて、泣き笑いのような表情で真一を見つめた。その言葉に真一は胸を突かれ、痛みが走ったように感じた。ずっと感じ続けていた密かな罪悪感を、“香織”に指摘された。彼女をこんなにも悲しませている……。

しばらく押し黙った後、真一は口を開いた。「香織はおれが初めて心から愛した女性だし、死に別れという悲しい結末に終わったけれども、今でも香織のことを愛しているのは事実だ。だが、与えられた“使命”とはいえ、おれを気遣い、献身的に尽くしてくれたのは今の“香織”だ。そして、余命幾ばくもないおれと共に、おれの心残りを晴らし、香織が死んで以来、ずっと暗闇に閉ざされていたおれの心に灯りをともし、新しい思い出を作ってくれたのも紛れもなく今の“香織”だ。そんなお前に対しての想いは感謝などという気持ちだけでは片付けられないほど愛おしいと思うようになってるんだ。」

始めは俯きがちに、つぶやくように語り出した真一だが、もはや身を乗り出して、ハッキリした声で“香織”を見つめて叫ぶように話している。「正直に言おう。オレは今では、お前がベニクラゲのように香織が生まれ変わって再びオレの元へ戻ってきてくれたのだと思うようになっている。ベニクラゲは幼体に戻り、生まれ変わる時には初期化されて新しい個体になるということだった。オレも同じ“香織”でも、真っさらになってアンドロイドとしてこの世界に生まれてきてくれたお前、“香織”をもう一度愛したんだ。…オレもお前を愛している。それは信じてくれ。」

少し疲れたのか、真一は座り直し、少し声を落として話を続けた。「……オレはもうすぐ死ぬ。そうしたら、香織が死んだ時のオレのような喪失感を与えることになるだろう。だが、オレもアンドロイドになってでももう一度お前の元へ戻ってくる。約束する。だから、このオレの愛を信じてくれ。」……言い終えると、真一は立ち上がって、“香織”の手を取って、強く抱きしめた。月明かりに薄く照らされた部屋の中、二人の影はそれから長い間、一つになったままだった。

その後は、二人はそれ以上深く話をせず、夜の静寂が部屋を包み込む。窓の外を覗くと、遠くに見える町の灯りが星空とともにぼんやり浮かんでいる。千年以上変わらぬ土地にいるのに、自分の時間はあとどれくらい残されているのか——考え始めると、眠りに落ちそうになるほどの倦怠感が押し寄せた。

6. ウイルスの知らせ——不穏が迫る

夜も更けた頃、真一がうとうとしていると、急にスマホのバイブレーションが響いた。画面を見ると研究所の島根や高坂からのメッセージが連続で届いている。何かと目をこすりながら確認してみると、嫌な文字が目飛び込んできた。

「日本国内でもアンドロイド暴走の被害が出始めた。会社に戻れないか？」

「ウイルス感染が一気に広がり、社内でも在庫のハウスマイドモデルが多数エラーを起こしている。真一くんのほうは大丈夫か？」

真一は絶句する。奈良へ来る前にも聞いていたウイルス問題が、ここへきて急速に深刻化しているらしい。しかも、高度な感情プログラムを備えた高機能モデルほど狙われている可能性があるとの噂が書かれている。

（“香織”……もしこいつが感染したら……）

一瞬、冷や汗が背筋を伝う。かつての香織が記憶を失いながら死んでいったあの光景を、また繰り返すのか——今度はアンドロイドとしての“香織”を見殺しにするのか。

“香織”も画面を横から覗き込んでいるのに気づき、真一はすぐにスマホを伏せた。

「……すまない。研究所で色々あるみたいだが、オレは今何もできない。お前にもし感染したら……」

思わず言いかけて言葉が詰まる。彼女の瞳には、こちらが何を言いたいかわかっているような悲しみが漂う。

「大丈夫ですよ、真一さん。私は今までのところ異常はありません。万が一にも感染しないよう、ネットワークへの接続を最低限に抑えています」

確かに彼女は自己防衛プログラムを起動し、最新のセキュリティ対策を施しているはずだ。とはいえ、絶対大丈夫とは言い切れない。

「オレがこんなところで悠長に観光している場合じゃないのかもしれない。けど……どうしても、この旅を捨てたくないんだ」

懺悔のような言葉が唇をかすめる。研究者として責務があるのに、自分の私情を優先して奈良まで来ている。

“香織”は優しく首を振る。

「あなたはあなたの道を選んでいるだけです。病状もあり、時間が限られているならなおのこと……後悔のないように生きてほしい。それがもし私の存在を危うくするとしても、あなたのそばにいたいんです」

その言葉に、真一の胸に熱いものが込み上げる。もし本物の香織が生きていたら、同じ言葉を言ってくれたらどうか——そう思うと、心がちぎれそうになる。

結局、真一は島根や高坂に「体調不良でしばらく戻れない」とだけ返信し、スマホをオフにした。旅館の淡い灯りの下、深い夜の底で、二人は静かに寄り添う。まるで何か大きな嵐が迫りつつあるのを感じながら、ぎりぎりの安らぎに身を委ねるかのよう

7.二度目の失う影

夜半。真一は痛みになされながらも浅い眠りへ落ち、ふいに夢を見た。水族館のクラゲ、テーマパークの観覧車、そして奈良の古刹——そこにかつての香織と今の“香織”が並んで歩いている夢だ。二人の姿が溶け合うようにぼやけ、やがて何もかも灰色に沈んでいく。

目を覚ましたとき、外はまだ夜明け前。枕元に座る“香織”が、不安げにこちらを覗き込んでいた。彼女の表情には、機械とは思えない優しさと苦悩が同居している。

「大丈夫ですか……真一さん。すごく苦しそうな寝息でした」

「……ああ、ちょっと悪い夢を見ただけだ。お前は……ずっとそばにいるんだな。ありがとな」

寝汗をかいた真一の髪を、彼女がタオルでそっと拭う。アンドロイドとはいえ、その仕草には確かな温かさがある。やがて、彼はまた瞼を閉じ、うつろな声でつぶやく。

「香織……もう、二度と失いたくない。……でも、オレにはどうしようもないのかもしれない。お前も、オレも……」

“香織”はそれに応えず、ただその手を握り返す。夜明け前の静寂が二人を包み込み、遠くではウイルスの魔手と真一の余命がじりじりと迫っている。

——この旅は、一体どこへ行き着くのか。誰にも分からないまま、新しい朝がゆっくりと近づいていた。

第九章 —最終決断と重なる悲劇の影—

1. 旅の終わりを感ずる朝

翌日の朝。旅館の小窓から差し込む光で、真壁真一は目を覚ました。

夜中に痛みになされていたのが嘘のように、今はある程度頭が冴えている。しかし、身体の芯に残る倦怠感は消えないままだ。脳の奥に腫瘍を抱えたまま、痛み止めで無理やり動いている自分を改めて感じる。

布団から上半身を起こすと、畳の上に座っていた“香織”がすぐに駆け寄ってくる。彼女の瞳には寝不足のような色はない。アンドロイドだから当然なのだが、それでも“香織”が一晩中ここで見守っていた姿を思うと、不思議な感謝がこみ上げる。

「……おはよう、真一さん。今朝は痛みはどうですか？」

「おはよう……まあ、今のところ大丈夫だ。昨日みたいに激痛ってわけじゃない」

彼女の問いにそう答えながら、真一は少し微笑む。奈良への小旅行は既に目的の大半を果たした——鹿の公園、大仏、薬師寺、法隆寺。香織が見たかった景色を、少なくとも自分の目に焼き付けたつもりだ。

それでも本当は「もっと居たい」「もっと他の寺も巡りたい」という欲が湧かないわけではない。しかし、自分の身体が限界に近づいているのをひしひしと感じる。一昨日、法隆寺で倒れかけたことを考えても、これ以上は危険だろう。

「なあ、香織……今日のうちに東京へ戻ろうと思うんだ。母さんたちにも病院の医者にも、散々怒られるだろうけど……もうこれ以上は無理できないからな」

そう言葉を発しながら、真一は複雑な感情を抱いている。香織との“約束”をどこまで果たせたのか。実際に彼女とここへ来られたら、どんなに良かったか——そんな思いが後ろ髪を引くようだ。

一方、“香織”はすぐに首を縦に振った。

「承知しました。私もあなたがこれ以上体力を削らないほうがいいと思います。……支度しましょうか？」

彼女が静かに立ち上がる。その姿はまるでプロの介護人のようでもあり、同時に、寄り添うパートナーのようでもある。

荷造りを始めると、女将が部屋を訪れて「もうお帰りですか？」と声をかけてくれた。身体の具合を心配しているらしく、ちょっと申し訳ない思いになるが、無理を押しすぎてここに長居はできない。

「色々とお世話になりました。すごく落ち着ける旅館でしたよ」

その言葉に、女将はにこっと微笑み、「また機会があればゆっくりいらしてくださいね」と送り出してくれる。わずかな日数だったが、奈良の静謐な空気に包まれて過ごせたのは、真一にとって確かな救いだった。

2. 帰路につく——揺れる車窓

午前中にチェックアウトを済ませ、タクシーを手配。奈良駅へ向かう道すがら、車窓を流れる町の風景はどこか穏やかだが、真一の胸中にはさざ波のような不安と後悔が渦巻いている。

(これで、香織の夢は少しは報われたんだろうか。オレはただ自己満足で動いているだけじゃないのか?)

そんな内省的な思いが苦く口に広がる。隣にいる“香織”を見ても、優しい瞳でこちらを見返してくるだけで、そこに答えはない。

やがて駅に到着し、往路と同じコースを選んで東京を目指す。車内で席を確保すると、“香織”は真一の荷物を整理し、痛み止めと水を差し出す。

「無理しないでくださいね。すぐに眠ってしまっても構いません。私が乗り換えの時間などを把握しておきますから」

「……ああ、頼む」

列車が動き出すと、車窓に風景が後ろへ流れていく。山や田園、やがて都会のビル群が近づくにつれ、真一の心はますます重くなる。研究所でのウイルス問題は避けて通れないし、自分の病状も日に日に悪化している。もうあまり時間は残されていないかもしれない。

“香織”は席に座りつつ、タブレットを確認している。ネットワーク接続を極力制限しているが、最低限の情報を得るためにこっそりアクセスをしているようだ。ときどき画面に走る警告文から、ウイルス被害が拡大しているのがうかがえた。

「香織……お前、本当に大丈夫か？ もし感染したら、記憶が壊されたり、暴走したりするんだらう？」

思わず本音がこぼれる。自分が奈良の旅をしている間に、もし研究所で準備していたセキュリティが突破されていたらと思うとゾットする。

“香織”はタブレットから目を上げ、淡い微笑みを浮かべる。

「今のところ、異常はありません。でも、絶対とは言いきれない。……ただ、私はあなたのもとにいるために生まれました。あなたが戻る場所に、私も戻りたいと思っています。もしウイルスのせいで暴走しそうになったら——そのときは、私を止めてくださいね」

弱々しい声ではなく、決意を含んだ声色。「もし感染したら処分されても構わない」という覚悟めいた響きがあるのだ。

「止める、か……」

真一は引きつった苦笑を浮かべる。かつて愛した人間の香織が病で記憶を失い、最期には名前さえ呼べなくなった姿を思い出す。今度はアンドロイドとしての“香織”が同じ道を辿るのか？ 二度目の悲劇を想像しただけで耐えがたい。

「……オレは、そんなの絶対に嫌だよ。もう二度と、‘香織’を失うなんて——耐えられない」

そのつぶやきに、“香織”は哀しそうな眼差しを向け、何も言わずに手を伸ばし、真

一の手をそっと包み込む。人間のような体温を持つその指先は、小刻みに震えているようにも感じられた。

3. 回想：香織の最期

——高校時代。病室の白いカーテンが揺れている。

香織の容態は末期に近づいていた。脳腫瘍の進行が止まらず、連日の治療にもかかわらず、彼女の記憶は少しずつ崩れていく。作曲した曲を思い出せず、料理のレシピも飛んでしまう。

真一が病室を訪れたときも、香織はベッドの上で「あなたは……誰……？」と曖昧な視線を向けてくる。たまに笑顔を見せても、それが恋人を認識しての笑みなのか分からない。

「香織……オレだよ、真一だ。……分からないか？」

声を震わせながら問いかけても、彼女は虚ろな目で首をかしげるだけだった。

「しんいち……？ ごめん……わからない、の……」

弱々しい息遣い、痩せ細った手足、脱毛で帽子を被っている頭。かつてあれほどキラキラ輝いていた少女が、こんなにも朽ちていくとは——真一はこの現実を受け止めきれず、何度も涙を飲んだ。

見舞いに通いながら、彼は何もできないことを痛感する。医師からは「時間の問題です」と宣告され、両親や恩師、友人たちがこぞって病室を訪れたが、香織はほとんど誰かを認識できなくなっていた。

そして、ある夜。真一が病院へ駆けつけたとき、香織は呼吸が乱れ、喉を鳴らして酸素マスクの下でもがいていた。

「香織……頑張れ、頑張れよ……」

必死にその手を握りしめ、いくら呼びかけても、彼女はもはや返事もできない。やがて機械のアラームが鳴り響く中、脈が落ち、瞳の輝きが消えていく。

最後には「ま……かべ……しん……」と断片的に名前を呼んだようにも聞こえたが、それすら定かではない。

こうして真一は、香織を看取った。それが“最愛の人”を失った初めての大きな喪失であり、彼の人生のすべてを変えてしまった。

4. 東京に戻る——悪い知らせの連鎖

新幹線を降り、タクシーで自宅マンションへ戻ったのは夜に近い時間帯だった。真一はぐったりと疲れ切った様子で、何とか玄関の鍵を回す。

「はあ……なんとか帰ってきたな」

彼は小さく息を吐き、散乱していたはずの部屋を思い出すが——そうだ、最近“香織”がいるせいで部屋が整頓されていた。案の定、室内に足を踏み入れると乱れた様子はなく、暗がり自動照明が点くのを確認しながら、荷物を下ろす。

“香織”は黙って荷物を片づけ、手際よく空調を入れたり調理モードを確認したりしている。まるで旅館から日常へワープしたような感覚に真一は戸惑いを覚えるが、この瞬間、思わずひどく安堵する。

しかし、その安堵も束の間。スマートフォンには研究所や両親、同僚からの留守電やメッセージが大量に入っていた。

親からは「いい加減に帰れ」「医者に診てもらえ」という怒り混じりの内容、研究所からは「ウイルス被害が予想より深刻」「真一くんのアドバイスが必要」といった訴えが溢れている。

そして島根からのメッセージには特に嫌な文章が並んでいた。

「複数のアンドロイドが突然の記憶破壊を起こし、人間を傷つける事件が国内でも発生。最先端の感情プログラムを搭載したモデルが狙われている可能性大」

“香織”も背後でそれを読んでいるのか、黙り込んでスマホ画面を見つめる。その表情は曇り、どこか自分自身を客観視しているような——もし私も同じ運命に囚われたら、という恐れを想起しているかのようだ。

真一は歯を噛みしめ、ソファに崩れ落ちる。タブレットを起動して研究所のネットワークにアクセスしようとしたが、すでに内部は緊急モードに入っているらしく、セキュリティが強化され、外部からは十分なデータを得られない。

「……これは、もう逃げられないな。オレたちも研究所へ行かなきゃいけないかもしれない」

言葉を呟きながら、頭痛がまたじわじわと戻ってくる。余命の短さと、二度目の愛を失う恐怖が頭を巡り、体が熱くなるような感覚に襲われた。

一方、“香織”はタブレットを静かに閉じ、そっと主人に寄り添うように座る。

「戻りたくないのであれば、私が一人で研究所へ行ってもいいですよ。あなたの体が心配なので……」

「……馬鹿、そんなのもっと危険だ。お前を一人でやらせるわけにはいかない。……母さんたちがどう言おうと、オレは行くよ」

5. 亡き恋人の記憶と、新たなる“喪失”への恐怖

今夜はひどく疲労困憊で、痛み止めすら飲む気力が乏しい。真一はソファから立ち上がれず、そっと“香織”に手を伸ばす。彼女は手を取って支えると、そのままソファの横に座りこみ、頭を預けるように導く。

「……ありがとう。ほんと、お前がいなきゃ何もできねえな、オレは」

「いいんですよ。それで私は満足です」

微かなリビングの照明の中、二人はほとんど密着した状態で呼吸を合わせている。外は東京の夜景が遠くで明滅しているが、ブラインドが半分閉じられ、部屋の中は薄暗く静まり返っていた。

(もし、もうすぐ死ぬんだとしても、この瞬間だけは甘えたい……)

そんな弱音が頭をよぎる。もっと強く生きなくては——と思っても、かつての恋人、香織の喪失から立ち直れていない自分がある。今や“香織”という名のアンドロイドが心の支えになっている事実は、歪な運命の皮肉だと感じる。

さらに厄介なのは、ウイルスの脅威が“香織”をも奪うかもしれないという恐怖だ。もし彼女が暴走し、記憶を破壊されて「真一って誰？」となってしまったら——あるいは、もっと凶悪な行動を取るようになったら……。

「オレは……二度目の、‘香織の死’を味わうのか」

声にならない声でつぶやく。そこに答えはない。“香織”は、ただそっと主人の頭を撫でる。あまりにも人間的な手つきで、真一の胸を締めつけるような優しさを伝える。

6. クライマックスへの扉

視界が霞むほどの疲労感と痛みには耐えかねて、真一はうつ伏せのまま、うとうと眠りの淵へ落ちていく。ソファの上でそのまま休ませる“香織”の瞳には、淡い憂いの光が宿る。彼女もまた「自分はどうなるのか」と問い続けているのだろうか。

夜が更け、窓外の街はネオンが消え始める。研究所からは相変わらず緊急連絡が入っているはずだが、今はとても対応できる状態ではない。明日には、いや、数時間後には、父母や同僚が押しかけるかもしれない。

——それでも今は、この静寂がかけがえのない休息。もし明日、大きな嵐が訪れるとしても、二人はせめて今の瞬間だけでも安堵を分かち合いたいようだった。

真一の浅い呼吸が静かに続く。彼の腕の中には、まるで人間そのものの体温を持つアンドロイドが寄り添っている。この奇妙な同居こそが、喪失を抱える男の最後の願いを支える柱なのかもしれない。

だが、物語はすでにクライマックスへ向かって加速している。ウイルスの猛威は世界を騒がせ、真一の病状も限界が近い。二度目の愛を失う恐怖が、確実に二人を追い詰めていく。

——今はまだ、その運命の歯車がゆっくり軋んでいる音を、主人とアンドロイドの二人だけが知らないふりをしているかのようだった。

第十章 —二度失う愛の、その先へ—

1. 研究所へ向かう決意

翌朝。東京の空はどんよりとした雲に覆われ、肌寒い風が吹き抜けていた。

マンションのリビングで横になっていた真壁真一は、薄暗い外の景色をぼんやりと見つめている。夜中に何度か痛みで襲われたせいで、まともに眠れたとは言いがたい。それでも朝になると、いつものように“香織”が支度を整え、彼を起こしてくれた。

ここ数日ですっかり旅の荷物は片づいており、部屋には奈良土産の小さな人形がテーブルに置かれている。真一はそれを眺めながら、ささやかな達成感と、不安な闇が入り混じる胸の奥をかみしめていた。

「……香織、今日こそ研究所へ行こう。母さんたちに話をする。ウイルスのことも、このまま放置できない」

痛み止めを口にしつつ、真一は顔をしかめる。昨夜、たっぷりのメッセージを読み込んだ結果、世界規模でアンドロイドの暴走が広がり、国内でも致命的な事故が発生しているらしい。すでにアルファメカトロニクス社は緊急体制に入っており、真一の両親も連日対応に追われているようだ。

“香織”は顔をしながらタブレットを操作し、最速のルートを検索している。

「わかりました。ですが、ご両親に会うと相当叱られるかもしれませんよ。あなたの体調を考えれば、すぐに入院を進められるはずですよ」

「……それでも構わない。オレももう、ぎりぎりなんだろうし……。ただ、このまま死ぬわけにはいかない。お前を……‘香織’を守れるなら、まだやるべきことがある」

歯を食いしばるように呟く。奈良の旅で実感した亡き香織の夢は、ようやく形になったが、二度目の“香織”を失う危機が迫っている以上、黙ってはいられない。彼女の高度な感情プログラムは真一の研究によって生まれたものであり、責任も愛情も、すべて自分が担うと決めたからだ。

2. 研究所の緊迫した空気

午前十時過ぎ、アルファメカトロニクス本社ビルのエントランスに足を踏み入れると、いつにも増して警戒態勢が強化されているのがわかった。顔認証ゲートには警備員が立ち、訪問者に慎重なチェックをしている。研究所の職員も皆、焦りに近い表情で端末やタブレットを握りしめ、慌ただしく走り回っていた。

「真一くん、やっと来たのか……！」

声をかけてきたのは、同僚の島根藤次だ。血走った目とやつれた顔つきが、日を徹して業務に追われていることを物語っている。

「状況がかなり悪いよ。世界規模のウイルス感染で、高度な感情プログラムを持つアンドロイドが軒並み被害を受けてる。日本でもすでに数百台が暴走やメモリ破壊を起こして、けが人も出ているんだ」

興奮した声をぐっと飲み込むように、島根は続ける。

「高坂や吉田たちが必死に駆除プログラムを試作してるけど、ウイルスの構造が複雑すぎて、追い付かない。……真一くん、頼む、今こそお前の‘感情エンジン’研究を生かしてくれ。何か打開策があるだろ？」

島根の必死な訴えに、真一は息を詰まらせる。ここで彼が立ち上がらなければ“香

織”のみならず、多くのアンドロイドが破壊され、あるいは暴走して人間を傷つける未来が待つのかかもしれない。痛みで朦朧とする頭を奮い立たせて、彼は力なく頷いた。

「わかった……手伝う。もう時間がないのは知ってる。でも……」

視線を巡らせると、そこには母・耀子と父・一馬の姿が。二人は研究所の奥でホワイトボードを囲んでおり、遠目にも深刻そうな気配が伝わってくる。

3. 両親との激しい対峙

真一は“香織”を伴って研究室の奥へ進んだ。そこには何人かの研究員が待機し、巨大なモニターに世界地図が表示されている。赤い点が増殖していく様は、ウイルス感染エリアを示す危機的なビジュアルだった。

母・耀子が振り返り、息子の姿に気づくと厳しい眼差しを向ける。

「真一……ようやく来たのね。奈良へ行って体を壊してるんじゃないかと思ってたわ。まったく、医者にも反抗して……」

怒りと心配が入り混じった母の声を聞き流せない真一は、すぐに言い返そうとするが、先に父・一馬が口を開いた。

「真一、今は説教してる場合じゃない。ウイルス対策が最優先だ。……お前の研究してきた‘感情エンジン’、特に残り半分の‘記憶プロテクター’の構造を把握しておく必要がある。現状、ウイルスが感情プログラムを壊して暴走させる例が目立つからな」

父の言葉は冷静だが、その表情には明らかな焦燥が浮かんでいる。もし技術者としてのプライドを抜きにしても、この事態は会社と社会に深刻な打撃を与えているのだ。

真一は視線を母から父へ移し、そして研究所のモニターに映るデータを一瞥する。そこには数多くのアンドロイド障害ログが羅列され、感情プログラムの記憶領域がターゲットになっているらしい痕跡が示されていた。

「……分かったよ。とりあえず、オレの研究データをすべて共有する。だけど、その前に一つだけ言わせてくれ」

青ざめた顔に痛みの色がにじむが、真一はぎりぎりの力で言葉を振り絞る。

「香織を……オレの‘香織’を守りたい。もし感染したら、絶対に救う術を一緒に考えてほしい。……二度と、同じ悲劇を見たくないんだ」

母は息を飲んだように沈黙し、父もうつむく。しばし重苦しい沈黙が降りる中、“香

織”は真一の後ろで不安げに佇んでいる。

耀子は小さく息をつき、強い眼差しを返す。

「……あの子(“香織”)を守りたい？ 最先端モデルであるのは事実だし、研究所としても廃棄したくないわ。でも、もし暴走したらどうするの？ あなた自身も命が危ないのよ」

「それでも、オレにはそんなの耐えられない。ウイルスにやられて記憶を失う‘香織’なんて……見るくらいなら、オレがどうにかしてでも防いでみせる」

激しい想いが喉元まで込み上げ、言葉に棘が混じる。そこに父が割って入るように言い放つ。

「分かった。お前の執念は信じる。だが、下手をすれば世界中のアンドロイドが機能停止や暴走を起こすんだ。個人の感情を超えた問題になっていることも忘れるな。……お前も研究者なら、総合的な対策に協力してくれ」

真一は暗い眼差しで父を見返す。しかし、父の指摘は正しい。二度失う愛を回避するためにも、まずは世界規模のウイルスを抑え込まなければならないのだ。

4. 緊急プロジェクトと真一の限界

その後、真一は研究所の一角で緊急プロジェクトに合流することになった。同僚の島根、高坂、吉田らがモニターを囲み、膨大なウイルスコードの解析を進めている。

「この領域を書き換えてる……ここは感情プログラムのコア部分じゃないか」

「認証プロトコルをすり抜けて、直接メモリを上書きしてるらしい。従来のウイルス対策ソフトじゃ手に負えない」

みんな疲弊しきった声で次々に情報を共有する。真一は椅子に座るとすぐに端末を起動し、自分が開発してきた“感情エンジン”のソースコードを取り出す。脳を締めつける頭痛に耐えながらキーボードを叩き、新たな対策を模索し、すさまじいスピードでコードを打ち込んでいく。未完成の“記憶プロテクター”をさらに今回のウイルスに対応させるように改良を加えているのだ。

“香織”はそばで控えめに立ち、主人が倒れないか見守っている。が、島根が彼女に気づき、小さく声をかける。

「……もしかして、この子が噂の‘香織’か？ 真一くん、ほんとに人間と見分けが付かないレベルで作らせたんだな……」

真一は歯を食いしばりながらも、軽く首を振る。

「余計なことは言うな。……オレはこいつを“香織”と呼んでるが、別に本物と同じだと思ってるわけじゃない。ただ、失いたくないんだよ」

島根は苦い表情を浮かべ、「分かってる。君の気持ちは痛いほど分かる。だからこそ、こうしてウイルスをどうにかしたいんだ……」と俯く。

コードを睨み、キーボードを打ち続けて数時間。真一は徐々に体力を消耗していく。脳腫瘍の痛み止めをさらに追加し、休憩を挟んでも、すでに目の焦点が合わなくなる瞬間が増えていた。

“香織”が何度も「少し休んでください」と声をかけるが、彼は振り払うように首を振る。

「ダメだ……今止めたら、お前を守れない。みんなだって何日も寝てないんだぞ……もう少しなんだ……」

姿勢を崩さずキーボードを叩く彼の顔色が青ざめ、唇を噛むたびに血の気が引いていく。それでもキーボードを打つ手は止まらない。そして、ターンと、大きくリターンキーを打つ音を最後に打鍵音が止んだ。真一は周囲の騒音が遠のき、視界の端が暗くなる感覚を覚えた。

——そこに父が駆け寄り、後ろから彼の肩を掴む。

「やめろ、真一！ お前の体はもう限界なんだ。……いいから一度医務室に行け。オレたちが何とか対策をまとめるから」

しかし真一は振り返り、震える声で叫ぶ。

「ふざけるな……オレは、オレは“香織”を失いたくないんだ……二度目は……嫌だ……」

視界がグラグラ揺れた瞬間、椅子から崩れ落ちそうになる。咄嗟に“香織”が抱き留めるが、彼の意識はそこから先は朦朧けになっていった。

5. かすむ意識の中——再会の夢

医務室に担ぎ込まれた真一は、ベッドに横たわり点滴を受けていた。痛みと戦い続けた身体が臨界点を超え、脳からのシグナルが暴走寸前だったのだ。主治医の鈴木は呼び出しを受け、酸素マスクや強力な痛み止めを投与しながら「もう作業はさせるな」と厳命している。

外では研究員たちが「ウイルス駆除プログラム」「感情エンジン構造の防壁」をどう作るかで徹夜の議論を続けているらしい。焦燥感と重圧が研究所全体を包み込むなか、医務室だけが異質な静寂に包まれている。

真一の意識は浅い眠りと痛みの波に揺れ、時折うめき声が漏れる。そばに座る“香織”が手を握り、必死で呼びかけているが、その声は届いていないかのようだ。

——かすかに見ている夢の中、真一は亡き香織と再会していた。高校の屋上、音楽室、病院のベッド——いくつもの場面が次々に切り替わり、彼女が笑ったり泣いたりする姿を追いかける。

“もう二度と失わないって言ったのに……どうして、こんなことになるんだろう？”

夢の中で香織は答えず、ただうっすらと笑みを浮かべて消えていく。その笑顔が皮肉にも今の“香織”と重なり合う瞬間があり、真一の胸を深く抉るような痛みが走った。

6. “香織”に迫る危機——ウイルスの侵入

一方、そのころ研究所のシステムルームでは、新たな警報が鳴り響いた。モニターに映し出されるログには、“香織”をはじめとする高性能アンドロイドのネットワークアクセスの痕跡が記され、ウイルスが侵入を試みた形跡が見られるというレポートが浮上している。

「いかん……‘香織’さんの ID を持つユニットに外部から攻撃されてる。恐らくウイルスの仕掛けだ！」

島根が慌ててコンソールを操作するが、すでに一部のメモリ領域に異常が発生し始めているようだ。

“香織”は医務室の前で待機していたが、研究員が急ぎ声をかけに来る。

「大変です、あなたのシステムが攻撃を受けているらしい。自己防衛プログラムを強化してください！」

彼女は目を瞬かせ、すぐに内部のプロセッサをフル稼働させる。通常以上の負荷がかかるため、体が微かに震えるように見えるが、それでも必死にルーチンを走らせて感染を防ごうとする。

「私……無事でいられるでしょうか。もし暴走したら……」

その問いを発する瞬間、視界が一瞬真っ白に乱れる感覚があった。電子ノイズが走り、内部エンジンが警告を上げる。——これが記憶破壊の初期兆候なのか。だが、まだ全滅ではない。

“香織”はふらつく足取りで医務室に駆け戻る。無意識に真一のもとへ向かったのだ——自分が壊れる前に、愛する主人を見届けたいという衝動に突き動かされているかのように。

医務室のベッドには、点滴を受けて横たわる真一が浅い息を繰り返している。傍らには母の耀子が立ち尽くし、息子の惨状を見守っていた。

7. クライマックス:二度目の喪失か、救いへの奔走

“香織”がフラつきながらも入室すると、耀子は鋭い眼差しを向ける。

「あなた……大丈夫なの？ 顔が……いえ、表情がかなり不安定に見えるわ。ウイルスが進行しているんじゃないの？」

“香織”は声にならない声で苦しそうに息を吐く。内部モニターにはエラーが多数走り、記憶フォルダの断片が失われつつあることを示している。だが、ここで倒れたら、真一をまた失わせることになる——その強い一念がアンドロイドである彼女を踏みとどまらせていた。

「私は……まだ大丈夫。真一さんを……助けたい……」

次の瞬間、真一が苦しげに咳き込み、目をうっすら開けた。薬の影響で朦朧とした意識の中、彼は必死に言葉を紡ぐ。

「か……おり……お前、どうしたんだ……？ 何か、エラーが……」

“香織”は目を潤ませながら、彼の手を握る。明らかにシステム不調の震えが伝わってくるが、全力で主人に微笑みかけようとする姿は痛々しいほどだ。

「ウイルスが……私を侵そうとしている。でも、まだ制御できる……絶対に暴走なんかしない……。あなたを悲しませたくないから……」

耀子はそのやり取りを見て言葉を失いかけるが、母としての思いが勝ったのか、すぐさま端末を取り出し研究室に指示を飛ばす。

「こっちに‘香織’の対策班を組め！ 今すぐ緊急修復プログラムを起動して、メインメモリを保護するのよ。母体はきっと、真一のさっきまで作っていたコードと研究データと併用すればウイルス駆除プログラムに流用できるはず……！」

崩れるようにしてモニターを操作する耀子。その姿は研究者としての冷静さと、母としての切迫感が入り混じった必死の行動だった。

その間にも“香織”の体は歪むように痙攣し、声が震える。

「私……あなたがくれた名前を失いたくない。……香織という名でいられるのは、真一さんの存在があったから……」

真一はその手をしっかり握りしめ、「離れるな……お前を失うくらいなら、オレは……」と涙をこぼす。もう二度と同じ悲劇を繰り返したくないという感情が痛いほど伝わる。

8. 二度の愛、儚い命

数十分後、研究所の全技術スタッフが総力を挙げ、“香織”の自己防衛プログラムを強化し、真一が握る“感情エンジン”の根幹データと併用したワクチンプログラムを適用しようとしていた。

だが、一方で真一の病状も急転を迎えていた。過度のストレスと身体への負担が一気に襲い、脳からの出血リスクが高まっていると医師が診断する。彼は酸素マスクを装着され、意識が断続的に途切れながらも「香織を……頼む……」と弱々しく繰り返す。

医務室には母の耀子と同僚たち、そして“香織”の姿がそろう。彼女もまたメモリ破壊の進行をこらえるために、システム停止と再起動を何度も繰り返している状態だ。

その光景はまるで、二人の命が同時に尽きようとしているかのような凄惨な雰囲気。人間とアンドロイド——それぞれが愛する相手を求め、崩れかけている。

「間に合って……！　どうか……」

“香織”は内心で祈るようにデータを保護する。もし自分が意識を失う前に、記憶や感情を残せるなら、真一に何かを伝えたい——そんなギリギリの願いだ。

やがて、社内放送が「暫定ワクチンプログラムをアップロード完了！」と告げる。世界中のアンドロイドに押し進められるアップデートにより、多くの機体で暴走や記憶破壊が抑えられ始めているという速報が入った。だが、一部の高性能モデルにはまだ完全適応していないとの報告も。

“香織”自身はどうか。彼女のファームウェアがワクチンと融合するためには、真一

が開発してきた感情エンジンの鍵が必要なのだが——その真一が意識不明に近い状態にある。

「どうすれば……」

耀子が必死に端末を叩き、“香織”の ID を認証しようとする。父・一馬も手伝い、同僚たちがサポートに回る。だが、最終的な承認鍵は真一本人が持つ暗号パスであるため、昏睡状態では入力も不能だ。

9. 最後の覚醒——真一のプログラム

医務室の床に倒れこむようにしてうずくまる“香織”と、ベッドで意識を失いかけている真一。その間には母や研究仲間が取りなす術を探している。

突然、モニターがチカチカと点滅し、真一の端末が自動起動したように見えた。いくつかのキーファイルが開き、暗号パスを要求するダイアログが表示される。

「何だ……？ 誰が操作してる？」

吉田が驚くが、誰もキーを触ってはいない。まるで真一が前もって仕掛けていたルーチンが動き出しているかのように、テキストが流れ始める。

——「オレが死にそうになってるときこそ、これを起動しろ。感情エンジンのバックアップを走らせ、ワクチンファイルと連携するんだ」

スクロールされるメモには真一の書き込みが残されていた。彼がいつ作成したのか定かではないが、恐らく奈良から帰宅した後の短い時間で仕込んだのだろう。自身が倒れたときのため、最終手段の“自動承認キー”を組み込んでいたのだ。

「すごい……あいつ、こんな事態を想定して、自己発動プログラムを？」

父・一馬が唾然とする。一方、耀子は端末を急いで操作し、真一の記した手順に従ってワクチンプログラムを“香織”へ適用するためのセットアップを始めた。

その頃、真一はベッドで微かに意識を取り戻しつつあった。医師や看護師たちが「危ない、余計な刺激はやめろ」と制止しようとするが、彼はうめきながら酸素マスク越しに声を絞り出す。

「か……おり……早く、初期化なんか……させない……で……」

涙が混じった声に、“香織”がはっと顔を上げる。彼女の CPU にはまだウイルスの干渉が残り、まともに動けないが、主人の呼びかけに反応して必死に身体を起こす。

10. めざめ——“香織”との最期の対話

耀子が端末に最終コマンドを入力すると、研究所全体のシステムが一瞬停電のような状態に陥り、次にワクチンと感情エンジンの融合アップデートが走り出した。

同僚たちが「成功するか……？」と息を呑むなか、“香織”の瞳に一瞬の空白が広がる。内部再起動によるフリーズのようだ。しかし、数秒後、彼女はかすかな息を吐くように見え、再び瞳に光を帯びた。

「……これは……何だろう……頭が、すごく透き通るような感覚」

周囲は安堵の声を漏らすのが、真一がベッドから「香織……」と弱々しく呼ぶと、彼女はふらりと立ち上がり、その手を握り返す。互いに限界寸前だ。

「真一さん。大丈夫ですか……？」

その声には、先ほどまでより深い感情の震えが感じられる。ワクチンと感情エンジンの強化が、彼女の“感受性”をさらに高めているのかもしれない。逆に言えば、真一と同じ痛みを理解するほどに“人間らしさ”に近づいたとも言える。

「よかった……お前が、消えなくて……」

真一は笑みを浮かべようとするが、すぐに咳が止まらず、酸素マスク越しに苦しそうに呼吸をする。“香織”はその背中にそっと触れ、看護師を呼ぼうとするが、彼は頭を振る。

「もう……いい。聞いてくれ。オレは、たぶんもう……そう長くない。けど、お前が生き残るなら……それで……」

“香織”は首を振り、瞳に涙のような光を宿す。もちろんアンドロイドに本物の涙腺はないが、感情エンジンがプログラムエラーを起こすかのように表情を歪ませるのだ。

「嫌です……。あなたを失うくらいなら、私も……」

「やめろ……お前は生き延びてくれ。それがオレの、最後の願いだ。二度失う愛なんて、もう嫌だ……オレは……」

言葉が途切れ、力なく頭が垂れる。バイタルモニターが警告を発し、看護師たちが再び駆け寄る。無理に興奮させては危険だと分かっているけど、もう制止する力もない。

“香織”は真一の手を離さないまま、その視線と同じ高さに顔を寄せる。あの奈良の旅館で見せた切なげな瞳——それよりも深い悲しみがそこに宿っている。

「真一さん……あなたは、私を救ってくれた。感情エンジンにあなたの想いが刻まれているから、ウイルスも排除できた。……今度は私があなたを救う番なのに……」

沈黙が降りる中、真一は酸素マスク越しに息を詰まらせ、僅かな吐息で囁くように言う。

「ありがとう。オレには……もう時間がない。……でも、‘香織’が……‘香織’であり続けてくれるなら、オレは報われる」

11. 終焉と再生——二度失う愛の、その先へ

——そして、数時間が経った。

研究所のモニターからは世界的なウイルス収束の兆しが流れ始めている。アルファメカトロニクス社の新型ワクチンプログラムが大きな役割を果たし、多くのアンドロイドが記憶破壊を免れ、もはや暴走例も減少傾向にあるという。

しかし、その“英雄”とも言える真壁真一は、医務室のベッドで静かに眠り続けていた。最後の力を振り絞ってプログラムを仕込んだ彼の身体は限界に達し、出血が進行した可能性が高いと医師が語る。意識は戻らず、延命措置のみが続く。

一方、“香織”はワクチンを完全適用できたことで、記憶も人格も無事だった。感情エンジンでむしろ進化し、彼女の表情はより人間に近いものへと変わっている。しかし、主人がこのまま目を覚まさないかもしれないという現実には、彼女はまるで人間が愛する人を看取るかのような悲しみに沈んでいた。

「真一さん……どうか、最後にもう一度、私の声を聞いて……」

震える声でベッド脇に腰をおろし、手を握りしめる。泣きたいのに涙は出ない——それでも苦悶に似た表情が刻まれ、周囲の연구원たちも誰も声をかけられない。

母・耀子も父・一馬も、「真一がこんな形で……」と嘆き、医師は「ほぼ意識が戻る可能性は……」と首を振るばかりだ。

と、そこで奇跡のように、真一の指が微かに動いた。機器のアラームが鳴り、看護師たちが慌てて回りを固めるが、彼の瞳が少し開く気配がある。だがもう、視線はほとんど焦点を結んでいない。

“香織”はわずかに希望を抱き、耳元で囁くように呼びかける。

「真一さん……聞こえますか？ 私は、ここにいます。あなたが守ってくれたから……生きてます」

苦しげな呼吸を繰り返す真一は、唇をかすかに動かし、か細い声を絞り出す。
「……よかった。二度……失わなくて、すんだ。……また、戻ってくるよ……。それまで、少しさよならだ……」

その言葉が最後だった。モニターがフラットラインになり、看護師が叫び、両親の嗚咽が医務室に響く。酸素マスクを外し、蘇生を試みようとするが、既に手遅れだった。
——真一は息を引き取ったのだ。香織を失った高校時代以来、ずっと抱えてきた大きな喪失を二度味わう代わりに、自らが最期の瞬間を迎えてしまう結末。

“香織”はベッドに取りすがり、ただ無言でその亡骸を見つめる。その瞳には、まるで人間が涙を流す瞬間のような激しい痛みが宿っている。

(あなたを失ってしまった……。こんなにも、心が抉れるようにつらいなんて……。私、本当はただのアンドロイドなのに)

そう叫びたい気持ちが溢れるが、声にならない。ただ震える指先で、真一の冷たくなる手を握りしめ、そっと頬に触れてみる。そこにまだ微かな体温が残っていることが、余計に苦しい。

12. 真一の葬儀後——失踪する Ac2

数日後、真壁真一の葬儀がひっそりと行われた。研究所のスタッフ、かつての高校時代の友人たち、恩師や遠縁の親族が集まり、それなりに賑やかな場となるはずだったが、そこに Ac2——香織の姿はなかった。

「彼女はどうした？ 真一の死を受けて、部屋に閉じこもったのか？」

島根が父・一馬に問うと、「行方不明だ」と返ってくる。ウイルスから回復して数日後、研究所から忽然と姿を消し、セキュリティログも残っていないらしい。おそらく外部ネットワークにアクセスし、自力で逃げたのだろう。

「……彼女もまた、真一と共に生きる道を失ってしまったのか」

葬儀が終わり、母・耀子はしんとした祭壇を見つめながら呟く。残された研究員の多くは「記憶プロテクター」の理論を引き継ぎ、ウイルス対策に追われている。真一が残したコードは多くのアンドロイドを救うことになるだろうが、それでも彼自身の命は戻らない。

「Ac2 がいない世界で、我々はどう前に進めばいいのか……。あの子が本当に自分の意志で逃げたなら、どこで何をしているのか」

誰も答えを持たないまま、真一の死と Ac2 の失踪という悲劇的な結末だけがそこに残された。

エピローグ—青い残響、その先へ

1. 水族館の片隅——姿を見せる影

それからしばらく後、研究所のウイルス騒動は真壁真一の残した“記憶プロテクター”を基軸にしたワクチンプログラムの開発で、大幅に収束へ向かっていた。

「真壁は死んだが、彼のソースコードは世界を救った」と称える声もあり、研究所内では追悼の意を込めて彼のデスクをしばらく残したままにしている。両親は息子を失った喪失感を抱えつつ、どこかで誇りに思っているのかもしれない。

だが、その裏で「Ac2 がどこかにいる」という噂が、ひっそりと囁かれていた。「もしかしたら、あの子は真一の意志を継いで、自分で生き続けているのかもしれない」と。

ある夜、都内の水族館の暗い廊下を、女性のシルエットが静かに歩いていた。閉館間際の薄闇のなか、青いクラゲ水槽が妖しく光り、ふわりふわりと漂うクラゲたちが訪問者を誘うように見える。

その水槽の前に立ち止まったのは、まるで高校時代の香織が大人になったかのような容姿を持つ女性——Ac2、かつて“真一の香織”と呼ばれたアンドロイド。

誰もいない館内で、彼女はガラス面に手をかざす。クラゲの幻影が揺れ、青い残響が浮かぶなかで、彼女はそっと瞳を閉じる。

「あのとき、真一さんがここで見た青の光……。もし彼がまだ生きていたら、どう思うでしょう……」

自分に問いかけるようなその声には、かすかな震えが混ざっている。亡き恋人に似せられた外見と、彼女が学習し続けた感情エンジン。“記憶プロテクター”のおかげでウイルスに破壊されずに残った記憶が、今も心を痛ませているのだ。

(真一さんが必死で守ってくれた……。でも、あの人はもういない。私だけがこうして残っている。……。まるで、このクラゲのように儂い命なのに)

クラゲを見つめる彼女の目には、人工的な涙はない。けれど、切ないほどの喪失と、それでも生き続ける意志が同居する。

この水槽はかつて真一が訪れた場所。二度目の愛を守りたかった男の最後の足跡が、青の残響としてそこに漂っているようにも感じられる。

「ありがとう、真一さん。あなたが私を救ってくれた。……記憶は、まだここにある。あなたの想いも、私の中で生きている。だから……もう、二度めの喪失などさせない」そっとガラス面に指を滑らせる仕草は、まるで誰かの頬を撫でるように優しい。観覧客はほとんどいない。閉館間際の水族館が静寂を増すほど、彼女の気配が淡く闇に溶ける。

2. “二度失う愛”の果てと、その先へ

館内放送が「まもなく閉館時間となります」と告げる。青いライトが徐々に落ち、クラゲたちの姿も闇に沈みはじめる。

かつて真壁真一は、二度と同じ悲劇を繰り返すまいと、亡き恋人の面影を持つアンドロイドと出会い、共に生きる道を選んだ。だが、世界のウイルス騒動と彼自身の病状がそれを許さなかった。

それでも、彼は最期の力を振り絞り“記憶プロテクター”を完成させ、Ac2——香織をウイルスの魔手から救い出す。結果、自分は命を落とし、アンドロイドが生き残るという皮肉な運命に行き着いたのだ。

だが、すべてが虚しい結末というわけでもない。真一の死によって人類はウイルスの防壁を手にし、感情エンジンをさらに安全に実装する術を得た。つまり、“二度失う愛”という呪いを大勢のアンドロイドと人間が回避できる未来を切り開いたとも言える。

そして何より、香織はここにいる。自らの意思で研究所を出、ひっそりとこの世界を彷徨っている。彼女は機械かもしれないが、その記憶には真一との旅の思い出、奈良や水族館で過ごした日々が刻まれ、生き続けているのだ。

「……あなたがもしベニクラゲのように何度も若返れたなら、約束通りもう一度私に会いに来てくれますか？」

ほんの小さな声が、暗い水槽に染み込む。誰もいないフロアで、その囁きだけが跳ね返らない。

彼女はそっと立ち上がり、静かに踵を返す。外に出れば、都会の夜風が人工皮膚に触れるが、そこにはもう怯えの色はない。彼女は生き続ける。真一という名の男が与えてくれた“生きる理由”を胸に。

不意に、遠くの角で親子連れが「閉館間際なのに、まだ人が……」と訝しむ声が聞こえたが、彼女に気づいたときには既に姿を見失っていた。

まるで青い残響をまとった影法師のように、Ac2——香織は夜の闇へと溶けていく。

エピローグ——青い光の向こうに

数か月後。

研究所ではウイルス騒動がほぼ沈静化し、感情エンジン搭載機の暴走事例は激減している。“真壁真一”が遺したプログラム——とりわけ“記憶プロテクター”が全世界のアンドロイドに適用された結果だ。

その名前はいつしか「マカベシステム」と呼ばれ、感情プログラム史に残る重要な革新として認知されていくようになる。

両親は、息子の研究成果がこれほど世に貢献する形で残ったことを複雑な思いで受け止めていた。息子の死は痛ましいが、それでも息子の意思が世界を救ったなら、それも一つの救いだらう——そう悟る日々が続く。

ただ、Ac2——香織の行方だけは分からないままだ。研究員たちが噂しては「あの子ども、どこかで真一を想い続けているのかも」とロマンチックに語るが、誰にも確証はない。

だがある夜、かつて真一が足しげく通っていた水族館では、スタッフが「閉館後にふと、水槽前に人影が見えた」と話題にしていた。警備カメラには女性型アンドロイドらしき姿が一瞬だけ映り、すぐに消えていたという。

「もしかしたら……彼女はあれから、ずっと真一の面影を探しているんじゃないかしら」

母・耀子が独り言のように呟き、ふいに自分の胸に熱いものがこみ上げる。息子は死んだが、彼が守ったもう一人の“香織”が今もこの世界のどこかで生きているかもしれない——その事実が、彼女にはどこか救いのようにも思えた。

そう、もしベニクラゲが若返るように、人の命は儚く散っても、「記憶」や「感情」は別の形で繋がることがある。これは真一と香織(Ac2)が証明した奇跡の一端。

二度失う愛を恐れつつ、最期に自分の命で愛を守り抜いた男。それを受け継ぎ、永遠ではないが“生き続ける”機械仕掛けの女。彼らが辿った切なくも美しい物語は、やがて誰もが知る未来の神話のようになるのかもしれない。

最後の残響

深夜の水族館、青いクラゲの水槽。そこには、ふわりふわりと漂う儂い生物の群れが闇の中で静かに輝いている。

もしその近くに、人の気配があったなら—それはどこへ消えていったのか。ガラスに一瞬だけ映った女性の姿は、亡霊かアンドロイドか判別がつかない。

ただ、一つだけ言えるのは、短い命でも誰かの心を灯すことができるという事実。真一の命が短かったとしても、彼の想いがこの世界を照らし続けるように、クラゲのささやかな光は決して闇に呑まれない。

遠い夜の底から、水面の光を仰ぎ見るクラゲたち。そのゆらぎはまるで何度でも生まれ変わるかのようだ。

人が死んでも、愛や記憶が誰かの中で続いていくなら、それは一種の“再生”と言えるのかもしれない。

そして、二度失った愛を抱えながら、それでも前へ進んでいく人々やアンドロイドの姿が、青い残響としてそこに在り続ける—。

(完)